

日

本

音

樂

集

団

邦樂現代

特別座談会

外から見た日本音楽

日本の情緒・家元制度・わらべ歌

出席者 武谷三男・田中一光・長尾一雄・ふじたあきや

オペラへあだ〜初演日誌 歌奏篇⑤ 二木俊

第九号一九八〇年春

長沢勝俊作品集

長沢勝俊作品集

邦楽器作品の古典とも言える長沢勝俊の代表作。

人形風土記

組曲「人形風土記」
ニホホ/こけし/のりま/人形/遊びびな/きじうま/水うそ
子供のための組曲



●JRC-2523 ¥2,200

さわやかな音色とともに春を告げる伝統楽器の響き。

萌春

詩曲(尺八独奏曲)/胡春(箏と尺八)/箏四重奏曲/二つの舞曲
(合奏)



日本音楽集団

京田義八郎 ———— ●尺八

坂田龍山 ———— ●尺八

白根きぬ子、坂井とし子、野坂恵子、宮本幸子 ———— ●華

●JZ-2558 ¥2,200

磨きぬかれた典雅な響き、長沢勝俊の個性豊かな力作。

まゆたまのうた

まゆだまのうた(尺八、箏による)/三味線協奏曲/二つの甘藷詩
(尺八と箏、十七絃による)/風情(笛と打楽器のための音楽)



● 日本音楽集団

望月久八 ● 笛

宮田耕八朗、城田誠山 ● 尺八

杉浦弘和 ● 二律箏

宮本幸子、野坂志子 ● 箏

● JRT-2574 ¥2,300

最新
錄音

長沢勝俊が心から詩いあげた待望の新作！ 明春発売。
春三題 尺八協奏曲

春三題

有秋歸矣/花散雪
共寄西風(三味錄)/ 詞林一畫/錄

錦木によせて

五つの小島：龍王/南宮/青島/瑠璃/琥珀
野坂道子(二十歳)

飛驒によせる三つのバラード

步高/立門/林玉
坂田誠山(尺八)/石城知子(箏) 合

好評発売中

詳細な解説と音の実例で知る和楽器のすべて

日本企業誌



日本の楽器 ● 絃楽器/管楽器/打楽器/合奏例

監修・二木 樹、監訳解説・諸子平・北川清司/演奏・日本音楽集団、雅楽楽結会(雅楽のみ)
坂田藤也、宮田耕久朗、坂田素雄(尺八)/望月太八(篠笛、能管)/白根さゆ子、坂井とし子(十三絃)/
野成志子、中丸春美、上木康江(二十絃)/宮本幸子(十七絃) 他
●JZ2-2520-1 2枚組 ¥4,400

いま、鮮やかによみがえる伝統音楽

鹿の遠音

尺八古典名曲集

異の逢着/鶴の榮耀/雲井蘭子/塚安/手向
/山崎/本義/下り業



●JR2-2563—64 2枚1組 ¥4,400

山本邦山が初めて都山流の本曲を集成！

寒月

鄱山流尺八本曲名曲集成

流相中尾都山作動：寒月/湖上の月/君清
水/夕月/木枯/紅葉/朝風/雪海堂



山本邦山 ●RA
●JRZ-2575-76 2枚 | 箱 ¥4,400

RCA 発売元 / RVC株式会社
Records and Tapes

文取 あやとり

現代邦楽の曲角などと、もっともらしい言葉が囁かれてから数年たつ。が、昨年末、例年のごとく一年間の日本の作曲の集計を行なっていたら、現代邦楽といわれる領域の新作が、八十曲以上も誕生しているのに、驚いてしまった。

その、実に多種多様な作品を、ここで反芻することはとてもできないが、いずれの分野の音楽創造にくらべても、私たちの美意識との深いかかわりあい、そして楽器への真摯なアプローチが、どの作品にもうかがわれて、洋楽レヴェルの作曲とは大いに異なった、あらたな創作姿勢が投影されている。

邦楽世界がすでに近世において完成されたとする見解は、多分まちがっていない。が、だからすべてが決着済みというわけでない。和洋折衷主義の「新日本音楽」という多少のまわり道はあったとしても、一九六〇年にはいつてまもなく勃興し、今日までに約二十年の足跡を刻んできた新しい価値観の上に立つ新邦楽の運動は、私たちの音楽史に大きなページが割かれるべきだと思う。

現代日本の洋楽作曲が、とかく精神的基盤の薄弱なのに対して、純日本的「新古典主義」ともいえる現代邦楽は、精神のリアリティを失っていない。作曲も演奏も同等の地平に立っているのがわかるし、私たち聴衆もまた、そうなのである。

(上野 晃)

邦楽現代第九号一九八〇年春 目次

文取

特別座談会

外から見た日本音楽

日本の情緒・家元制度・わらべ歌

武谷三男・田中一光・長尾一雄・ふじたあさや

父のピアノに始まって 柳家小三治

思いつくまゝ 地方文化と邦楽 堀川憲三

歌楽帖⑤ オペラへあた初演日誌 三木稔

日本音楽集団一九八〇年度前期
定期コンサート・シリーズ・プログラム

58春の総合定期演奏会

59定期演奏会 胡弓特集

60定期演奏会 日本民謡を採って

新しい邦楽を担う人たち 宮本幸子・半田淳子

日本音楽集団第七次海外公演

東南アジアに日本民族の芸能のルーツを求めて 三橋貴風

一九七九年度後期現代邦楽の作品と演奏 心に残ったものから

木村重雄・小宮多美江・土田貞雄・富樫康・長尾一雄

徳島における現代邦楽活動の現在と歴史 岡田寛斎

ほうげん抄

一九八〇年度日本音楽集団西日本公演の予定

一九七九年度日本音楽集団地方公演の記録

日本音楽集団第五回作曲公募の結果報告

日本音楽協会通信

日本音楽集団及び団員に関する今後の主な予定

外からみた日本音楽

日本の情緒

家元制度

わらべ歌

● 出席者 武谷三男・田中一光・長尾二雄・ふじたあさや(司会) ●

私の邦楽体験

ふじた 今日(きょう)の座談会のテーマは「外から見た日本の音楽」ということで、まことに思われるお願ふれが集まったものだと思っております……。

物理学者の武谷三男さんは、音楽や演劇に造詣(そうけい)深いことで著名な方です。グラフィック・デザイナーの田中一光さんは、かつては舞台に立ったこともおありで、隣接領域(れんけつりょう)に強い関心をお持ちです。長尾一雄さんは演劇評論家かと思えば能楽研究家——かと思えば音楽評論までなされる多才な方です。そして、私は新劇の劇作、演出に携(たづな)っています。日本音楽のファンの方として、邦楽器を使った劇場音楽を集団の方に作って頂いたこともあり……。

なまのからお話しを伺い、糸口にしたらどうかと思うのですが、日本音楽との接触(せっしゅ)はどんなものだったんでしょうか。武谷さんからお願ひします。

武谷 ぼくからですか、年功序列(ねんこうしゆれつ)かな(笑)。いつ頃からか全然見当(みあた)りつかないんですが……。ぼくは、六つの歳(とし)から小学校一年の終りまで大阪の近くにいまして。ぼくの記憶(きおく)では宝塚(たからづか)をちょいちょい見に連れて行かれましたねえ。あそこは洋楽(やうがく)と邦楽(ほんがく)と両方ミックスしたようなところで、レコードがラッパ(らっぱ)のでなくて蓄音機(じやくおんき)になった頃(ころ)、それとまだ電話(でんわ)でなくて学校唱歌(がくがう)の頃(ころ)でしたねえ。それから台湾(たいわん)に行きまして、高等学校(こうとうがく)出るまでいました。私の住んでいたのは日本人ばかりいる地区で、その路地(ろぢ)の奥(おく)の方(かた)にお

の先生(せんせい)がいて、ぼくはその先生(せんせい)嫌(きら)いだっただけですが、そこいらで遊んでるといつも筆(ひ)の音がしてましたね。これと親父(おや)の知り合いが家(いえ)へ琵琶(びわ)など持ち込んでやっていたり。それから姉(あね)が筆(ひ)を習(まな)い出して……、というようなことで、日本の楽器(がくぎ)とはそんな関(かん)り合(あ)いですね。存外(ぞんがい)パツとしないんです。むしろ外国(がいこく)の目(め)からいつも見ているような感じ。でもかな

り日本の音階(おんか)の音程(おんじやう)、そういうものの方がむしろ沁み込んでいますね、平均律(へんぐうりつ)でなくて。そのような気がするんですよ。ふじた 外国(がいこく)の目(め)から見ているよううでいて、実は体(てい)に沁み込んでいるというあたりが、多分(たぶん)私たちと共通(きょうつう)な部分(ぶぶん)ではないかと思うのですが。田中(たなか)さんなんかいかがでしょう。

商家(けしや)で、職人(しやくじん)とか小僧(こそう)さんがいたものから、何千代(なんちやう)、何丸(なんまる)とかいう芸者(げしや)歌手(こうしゅ)が歌謡曲(かやうきょく)歌うのが入ったレコードが大流行(だいりやう)で、よくかかっていました。八島(やしま)の娘(むすめ)とか……。それにぼくもよく宝塚(たからづか)見(み)まして、八紅(やこう)葉(は)狩(かり)とか八棒(やぼう)しぼり、八奴(やぬ)道成寺(みちせいじ)とか。割合(わりあ)い長唄(ながうた)が洋楽化(やうがくか)されて、水田(みづた)茂(しげる)という演出家(えんしゅつか)の、洋楽編曲(やうがくへんきょく)された邦楽(ほんがく)というのをよく聴(き)きました。ぼくも小さい時から少女歌劇(せうじょがく)が好きで、中学一年位の時(とき)一人(ひとり)でまだ宝塚(たからづか)へ行(い)けない頃(ころ)でしたから、千日前(せんじつ)前に松竹歌劇団(しょうちくがくだん)というのに行き、恒例(こうれい)の春(はる)の踊(おど)りとか秋(あき)の踊(おど)りとか見ました。客席(きやくせき)が真っ暗(くろ)になっていて、何とかでヨイヤサのボンと提灯(ていとう)に火(ひ)がつくってという演出(えんしゅつ)があつて……。それが多分(たぶん)邦楽的(ほんがくてき)な音楽(おんがく)だったような気がします。

美術学校(びじゅつがく)へ行くようになってからは、歌舞伎(かぶき)を見るようになったので本格的(ほんかくてき)に邦楽器(ほんがくぎ)に触れたというのは結局(けつぎ)下座音楽(げざおんがく)かもしれない。それとか、能楽堂(能楽堂)へ行

きましたから最初は笛や太鼓というよう
な楽器が印象的でした。ですから、そ
れまでは箏や三味線の音楽というのはあ
んまり身の回りにはなかったですね。

日本人で不幸で、子供の時から邦楽の
世界に入れない仕組みになっていますね。
日本音楽のほとんどは色街で発達してい
ますから。

武谷 そうなんです。

田中 ですからやっぱり宝塚みたいに、
比較的健康的なところから接触してゆく
という感じになるんじゃないかと思いま
す。

ふじた そう、子供には入り込めない世
界になってるんですね。その辺、長尾さ
んいかがですか。

長尾 私は第二次世界大戦が終る直前に
中学に入ったんです。私の家庭では邦楽
的な要素は全くありませんでした。父親
は歌舞伎なども非常に好きだったんです
が、やはり、中学生ぐらいの時に歌舞伎
見せるといふのは必ずしも良くないと思
えていたらしくて、あまり連れて行って
くれませんでした。まあ、最も、小学校
の時に寄席へ連れて行かれました。寄
席の私に対する影響が非常に悪かったの
で、ちょっとどうかと思ったのかも知れ
ません。

武谷 悪かったというのはどういう……。

長尾 ええ、廊下のまねをするとか、花
魁のあだ名の話とか……。結局、私の
頭の中に邦楽が入って来るというのは、

たまたま、田辺尚雄先生がお隣りにおら
れまして、隣のおじさんが研究してい
るっていうものは悪いことじゃないと思
って……。それでいっしょうけんめいラ
ジオで長唄を聞いてみたり。私の好みと
してはやはり洋楽の方が好きでしたが。

そんなことで、見るもの聞くものに興
味を持つという形で途中から段々そんな
風になって、まあ、邦楽もその一つとい
うことになってしまいかもしれませんが
……。そんな入り方をしましたね。

ふじた 長尾さんが大変ワールドの広
い方なのは、未だにその好奇心を保ち続
けているということなんでしょうけど。

私は伯母に長唄の三味線弾きがおいま
して、その影響が随分あったみたいです
ね。それにもう一人の伯母が小唄の師匠
で、母親も下町のしきたりで六歳から三
味線、踊りをやらされていたそうで、そ
ういうことがどっかで血になってるん
ではないかという気がしますね。芝居を
始めてから、郷土芸能に興味を持って各
地を歩いたりしても、わりとアレルギーな
しに入ってきたような気がしますけど。

まあ、身内にそういうのがあるといない
とでは大分違うだろうという気がします
ね。

皆さんの最初の邦楽体験を聞かせてい
たいたんですが、そういう目でご覧に
なっているのでしょうか、今の邦楽の状況
と言いますか。先程も、日本ではまず、
子供に邦楽と接する機会がないという話

がありました。確かに学校ではほとん
ど邦楽には触れないわけですね。通り一
辺にちょっと聞かせる程度で。

長尾 一応、鑑賞教材にであったり、楽器
もピアノでなくて箏を教えるもいいこと
になってると思いますけど。ところが
今度は教員の側に邦楽のわかる人がいな
い。ですから非常に長い目で見ていいん
だったら、今中学で鑑賞教材で聞かして
もらっている生徒が大人になって先生に
なった時、初めて邦楽というものが一般

家元制度のある文化構造

ふじた 家元制度というのは、ぼくはプ
ラスとマイナスの両方の要因があるん
ではないかと思うんです。家元制度自体を
保持してゆくにために、教える機能が肥太
化して、当然それは演奏家としての自立
の結果として拒む部分があったんではな
いかということ。同時にやはり家元制度
によって芸の伝承が確実に行われたとい
うことがあるんじゃないかと、思うん
です。その辺どうでしょう。

田中 現代芸術のようにすぐ簡単に手に
ふれるところがない。個人個人の内部に
そういう要求があっても手堅にその世界
に入ってゆけない、何か大きな壁を感
じますね。その代りに、中世からの雅楽、
能楽のようなものが、原型近く残ってい
るでしょう。ヨーロッパなどでも、バロ

化するというそんな感じがしなくもない
ですがね。その頃邦楽がなくなってい
やしないかという危惧とね、それはダブッ
て……。見通しはあまり明るくないです
ね。

ふじた 邦楽がなくなってやしないかと
いう恐ろしい話が出ましたけど、どうで
しょうか。(笑)

田中 しかし、家元制度がありますから
ね。

ク以前の音楽などは学校や研究者でし
か演奏できないのに、日本はそうでない。
そういう点が面白いんではないですか。
伝承的な利点といえますか。

武谷 つまり伝承的な利点というのは逆
に言えば発展を拒むということになって
いるんで。伝承にさえあぐらをかいてい
ればもう万事いんだと。だから伝承を
ありがたがるか、発展をありがたがるか
という……。ヨーロッパでは、バロック
とかバロック以前のものは教会などでは
ある程度伝承されているかもしれませ
んが、それがどんどん変わってきている。
しかし、家元制度がなくても立派に昔の
ものに復元できることを考えねばならな
いでしょう。ところで基本的に、それがど
んどん変わってきた方がいいのか、そのま



田中一光氏

まいつまでたっても同じようにやっているのがいいのか。そういう問題がありま

すよね。

田中 学問的にみれば原型のまま、残っているというのがいいんでしょうね。

武谷 学問的には大変けっこうだけれども、生活として、生活のものに成り得るかという

ことですね。

田中 日本人というのは、ふしぎに原型が崩れたものってあまり喜ばないんです

よ。片方でそれを充分に利用しているんですが、評価の対象にならない。

ぼくは明後日から、ロンドンへ行くんですが、ジャパン・スタイル展というのを

ビクトリア・アルバート美術館でやるんです。最初は日本のデザイン展だとい

うので、戦後に生まれた、グッド・デザインと称されたものを集めて展示する計画

だったんです。ところが、向うの館長が来まして、インターナショナルでヨーロッパや、アメリカのものが単に発展した段階のものは、わざわざロンドンまで持ってくる必要はない。実際、東京の街を歩いた方がもっとおもしろいものにぶつかるじゃないかと。お西様とかパチンコや、開店の花輪や、あるいは劇画や看板、食堂のプラスチックの見本なんかありますね。ああいうものの方がずっとジャパン・スタイルだというわけです。日本国内では大衆文化に対する評価が足りないんです。例えば国際交流では能とか歌舞伎というものはやっていますが、その後はかなり前衛になって、武満とか、天井敷とかになってしまふ。泉鏡花や源歌なんかたまには行ってもいいんだろけれど。そういうところが、大きく欠落しているでしょう。日常テレビで流れているような中間領域のものが、評価の対象になっていないということですね。古典か、外来かという風な両極端になっていると思うんです。

ふじた そういうところがありますねえ。田中 日本の真髄を知ってもらいたいという意味で、伝統的で精神的なものを出してカッコウつきたいんです。日本人ていうのはね。しかし、現実にはその真髄なんていうのはどこかに隠れてしまっていて、われわれの周辺には演歌があったり、ロックがあったりするわけです。

武谷 ええ、そうです。そうです。田中 その生の文化というものをあまり暫定的に考え過ぎて、それに論評が加えられていない。

武谷 それは日本人から言うと、むしろ恥部だという風に思うんじゃないでしょうか。

田中 そう、恥部なんです。だから、今度のこのジャパン・スタイル展にパチンコ持っていくというのは、かなり国内で色んな抵抗があって、ロンドン美術館長との間にずいぶんディスカッションがあったんですけれどね。ですから、そういう意味では、この展覧会はおもしろい試みなんです。

ふじた パチンコ持って行くんですか。田中 ええ。

一同 それはおもしろいですね。武谷 パチンコくらい日本人の生活に密着しているものは、何か評価しなくちゃいけないですね。

長尾 それと、今、恥部とおっしゃいましたが、そういうものをあまり喜ばない傾向というのは、現代だけじゃなくて、昔から民衆の原動力になっていたものが、どの時代にも過小評価されてきたと言えますね。多少高尚で、多少民衆が受け入れられるのに無理のあるようなものは家元制度で守ってゆくという構造が、明治時代には定着したと思いますね。

ふじた 家元制度に守られるようなものが高尚で、そうでない民衆のものというのはどちらかと言うと恥部的な感覚で捉えられてきたと言う……。長尾 まあ中には、平安末の後白河法皇が民衆の歌である今様を非常に愛したとか、足利義満が今の能にあたる猿楽を愛したとかいうこともありますし、義満の場合は乞食と仲よくしたといっているのしられていますね。いわば高尚趣味というのは一種の権威主義で、後世の家元制度はその権威を作ったり護つたりのために機能して来たと思います。

武谷 ひとつ質問があるんですけど。日本音楽集団の方というのは、皆さん家元制度の中にいらっしゃるんですか。

ふじた 演奏家の大部分が最初の師匠の關係で、家元制度の中に位置づけられているわけです。ですから本来いっしょに活動することはないわけで、それが境を越えて交流し合っていることに集団の意義の一つがあるわけでしょう。

武谷 だからそういう点でぼくは非常に興味があるんですけど。ぼくにとっては音楽集団というのは日本音楽の救いみたいな感じがするんですけど、これはおもしろくないと言ってみたいで

す。

ふじた われわれの邦楽は、大衆レベルから見ると

も一つ音楽集団の仕事でいうと、

わかれわれの邦楽は、大衆レベルから見ると

日本文化の特殊事情

ふじた も一つ音楽集団の仕事でいうと、

わかれわれの邦楽は、大衆レベルから見ると

と、手が届かないところに家元制度がある。他の連中はしょうがないから風呂場でうた歌っていたみたいで、そこに乖離があったと思うんですが。そこから辺をどうにかしようと言うのも音楽集団のひとつの仕事なんだと思うんですね。

田中 そういう構造の問題というのは、そのうちに、西洋音楽一辺倒の発想では行き詰まるだろうということで。各民族のアイデンティティみたいなものが見直されてきている。こういう時点で、邦楽の持つ位置というのは重要なんだと思います。しかし、純音楽の面から見ると、構造があってそれが感動に持ち込むというような西洋の純音楽の形式と、日本の場合の、直観と情緒からすぐ精神の方へ行こうとする、そういう二つの違ったなりたちが、やはりニューミュージックなどにも現われている。それは西洋純音楽風な内部構造を本質的にとらえていないですね。それはやっぱり三木稔さんなんかもこの音楽集団で初期のころ、苦勞されたところだと思えます。邦楽を純音楽という位置で正統的に演奏したというところ。ぼくはこの二重構造というものは、いまだに変わっていないと思うんですけど、どうでしょう。

武谷 ただ、インターナショナルとナショナルと、これはどうしたってないわけにいかないですね。日本人というのは変なところがありまして、内面、外面、というのが得意でして。家庭と社会とか、日本国内と外国、それをはっきり区別している。例えば元号、あれは内面ですね。だから、パスポートに昭和何年て書いて千九百何年ていっさい書かなければ、こりっぱと思うんですけど。

田中 日本の音楽がなかなか世界語になりにくいというのもそういう所でしょうね。

武谷 そうすると、そういう状況の中で日本音楽の教育ということはどうしたら良いものかと。日本人は昭和と西暦と二つ並べて教えるのが得意なんだから、いっそのこと、わらべ歌も三味線もずっと行くと。バラレールに西洋音楽もずっと行くと……

田中 というのが割合現状ですね。ぼくなど視覚人間ですから絵の話になってしまいうんですが、例えば印象派の太陽の光の捉え方、スーラとかモネとかは点描式に光の色を取り入れますね。ああいう構造的な考え方は日本人には全く欠如していると思うんですよ。むしろ、もっと直観的に紫と赤がいいとか、グリーンと赤がいいとかいう対比的なシンブルな直観力で判断して、しかもその中に情緒を求めるといって、どこかに文学性が濃いのですね。音楽にも語が多いし、われわれデザインみたいな、テクノロジーと共に行くような仕事でも存在する。企業のマークなど作っても謂れをほしがるんです。何からできているとか、どこから発想したとか……。そんなことは形がきれ

いだったら問題外なんですけどね。そういう文学的な感性というか、謂れの物語性、それは日本音楽にも全部につきまたってゆきますね。

だからそれをいきなり世界語に持ってゆけるかどうかということが、割合ぼくは重要だと思えます。西欧的な形式を借りなくてもです。

武谷 ただぼくは軍部ファシズム時代をずっと生きてきた人間なものですから、やはりその情緒依存的なものというのに危惧をいつも持つんです。それは理屈ではないとか、現実を認めるとか、精神で勝つんだとかいう風に直結する危険性をいつも考えるんですね。だから果してそれをどう考えるべきかということですね。

ふじた そうするとやはり直観プラス情緒ですぐ精神の方に行ってしまうパターンは、できうるべくんば否定すべきではないかと……

武谷 単純な否定ではなくて、ひとつそこを考えた上で。

田中 成り立ちの質が違うんですね。尺八とか琵琶のコンチェルト形式の西洋音楽がありますね、日本人の作った。あれは演奏者の狂気のようなものが突然高揚してくるでしょう。それと西洋音楽、つまり点描派風な論理の組み立てとどっかで合わなくなるんです。

ふじた それは芝居の方でもそうですね。ブレヒトの芝居がブレヒトが考えていた

ように日本で上演されたことはまずないし……

武谷 そうするとあの軍部ファシズムの時代、理屈抜きで天皇さま、ということではないのかという問題にぶち当たるんですよ。

長尾 いや、よく家元制度と天皇制といっしょに論じる人がいますね。これは別に花柳幻舟さんの専売ではなくて(笑)。私の考えで言いますと、天皇というものが元来、宗教国家的な代表司祭という意味を持っていますから、その国家では信仰と忠誠とが常に一致するということがおこってくる。この性質はどの時代の日本および日本人の間にも潜在的に存在していて、それをうまく誘導して最大限に発現させたのが太平洋戦争です。それとは別に、日本人の間のいろいろな小集団の論理もまた、宗教国家的な天皇制を自然に模倣してきて、武士道なんかは領主と家臣や領民との関係になると天皇制的です。家元制度にもそういうところがある



長尾一雄氏

て、そむくべからず、うやまうべしという事になって、権威者の持っている理念や品格にそむく者は排除される。服従と崇敬とが家元と他の人々を結ぶことになって、天皇制の姿に似て来るということはあると思いますが。

武谷 ぼくはよくわからないですけど、その家元制度と別にね、今の論理の問題として、そのけじめがはっきりつく論理があれば、ぼくは双手をあげて賛成しますけど、それがないとちょっと危惧を感じるんです。

長尾 具体的に私もわからないんですが、日本古来の原始時代からの日本的な感情というものを、それが大体論理に欠けていると言われればそこまでですが。ある点でそれを外側から洗い直してみようということをするべきでしょうね。それができなかったのが、軍部がやったのもあれは非常に粗雑なひとつの外側の論理を押しつけて、日本の伝統ってものを軍の考える天皇制ってものに理論化した。それで全体主義っていうものはできたと思うんですけども。国民はそういう論理的な武装がなかったし、教育もありませんでしたから、全部持って行かれてしまった感じがするんですね。

ふじた 本当に、その答えが見つかったら非常に簡単だと思うんですけども。(笑)

武谷 論理性というのは例えば、ベートーヴェンの音楽などは非常に論理的に



武谷三男氏

きていますよね。上手な指揮でシンフォニーなど聞けば、終わったら論理的な音楽がビシッと決まりますね。非常に感銘残すでしょ。そういう論理をぼくは論理的だと思っているんですがね。

ふじた 論理的でありながら精神が高揚するようなものが、日本的な土壌の中で咲くはずだという……。

武谷 ベートーヴェンがそうやっているんだから、いやベートーヴェンだけではありませんが、指揮者がそれをちゃんとやっているんだからそういう風なことがないんだらうかと……。

それから、実はぼくは小学校の時によく家に琵琶を弾きに来た人がいて、その歌に大変シビレを受けたんです。楽器としては琵琶は非常に魅力がある。しかしあの琵琶歌はかなわんと。実は日本音楽集団でなたかこの春に恋愛物の琵琶歌を歌われたんですが、琵琶は実にいいんだけど琵琶歌は悲憤慷慨なんです。音楽集団と言えども、謡曲とか小唄、

浄瑠璃にも悲壮感はあるんだけど、ちょっと違った悲壮感ですね。皆さんどうですか。私は琵琶歌とか詩吟には非常に異和感があるんですが。楽器としての琵琶のあのすばらしい音と悲憤慷慨というマツチしているのか。ああいうもんでないやいけないのか。もっと素直に歌えないもんですかね。

長尾 私は詩吟はともかくとして、琵琶歌はやはり両面あると思いますね。非常に叙事詩的な長所もあるし、ある程度悲憤慷慨だから好きだという面もあります。悲憤慷慨に特徴があるというのは演奏家も作曲家も気がついていて、それがある意味で利用しようとしている人もいるし、その逆の面を開拓しようとしている人もいるわけですよ。ここまで持ってきてしまったものというのには、やはり新しい理念で利用しないといけないですね。

武谷 オークストラで琵琶が歌なしでやるとぼくは非常に落ち着くんですよ。長尾 ええ、結局言葉は離れますと日本の楽器というのは、これまでなかった魅力を発揮する例というのは他にもあると思うんですけど。琵琶の個性が百あるとするとその中の二十か三十の部分だけに限定して伝統的に伝えてきているという面があるわけですよ。事なかれもって言う言えりでしょうし。例えばピアノだったら黒鍵を弾かないピアノという、そういう伝えられ方をしてきた楽器が多いと思うんです。

武谷 それから尺八のあのブシャーというむらいき、あれもその悲壮感と共通点があるような気がしますね。ふじた・長尾 それは好きなんですけどね。

ふじた ちょうど今私のやっている芝居で音楽集団のメンバーに尺八とか二十絃、琵琶をやってもらっているんですが、あの所まで論理的にせめて行きますね。そこから先、ある感情を観客に手渡したいというような時、実にうまく使えるんですね。言葉から離れた時に楽器として現代に機能するものがあるんじゃないかという、その辺に多分日本音楽集団の存在の意義もひとつあるんだらうと思うんですが。

長尾 ただ、逆もあるんですよ。三味線の場合は歌と合っていた方が自由なんです。武谷 それから浪花節ですね。琵琶歌ほど異和感はないけど多少ありますね。それから浪花節の三味線ほどおもしろいのはないですね。三味線音楽の中で素人考えですが一番表現力があると思います。ふじた 一度あるテレビ番組で、某浪花節語りさんときき合ったんですが、座談会の中に浪花節を語る部分をインサートしたんです。最初は三分でお願いします……。座談会やってみたら長くなりそうなので二分でお願いします、って言ったと同じものがそっくりそのまま二分になっちゃうんですね。更に本番になりましたって、ちょっと時間がなくなりましたと言

「たら、いいです、きっかけを出して下さい」。するときっかけでピタッと終わっちゃうんです。どこか省いているという事でなくて、きちんと時間内に収まってしまつて同じ感銘を与える。テンポも変るし語り口も少しづつ変わっていくわけで、そういう自在さみたいなものがある、言い替えば創造のエネルギーがすごくあるんだと思いましたけどね。

武谷 やっぱ大衆の音楽なんですよ。ふじた それと浪花節の場合にはいわゆるけんりの語りがどちらかというと、日陰の花になってしまつて、忠君愛国的なものが表街道を行つてしまつたという歴史があるわけですよ、そこをところをもう少し元に戻すと、けんり味のある様々なエネルギーな語りが生きてくるんじゃないかという気がするんですがね。

武谷 それから司会者をおっぱかしてすみませんが、ぼくには疑問が一杯あるので聞きたいんですが。ぼくの子供の頃から和洋台奏というのがはやり出してる、これが邦楽の発達に非常に影響して来るとは思いませんか。和洋台奏に始まつて宮城道雄になって行つて、その間平均律が出て来るというふうには。

長尾 芸術的にそういうことをききんと考えてやつた初期の人というのは宮城道雄だったと思いますけど。ただおそらく芝居や映画の伴奏というところでの和洋台奏というのはもっと前からあったでしょうけれど。

武谷 ええそうなんです。だからぼくはその和洋台奏によってむしろいわゆる邦楽器というものが、ひとつの生活になつてきているという面があると思いますね。

長尾 越後獅子とか宝塚など……

田中 しかし何しろ日本の音楽語ると全部庶民レベルになりますね。

武谷 わらべ歌のことなんです、ぼくの小学校三、四年の時から童謡が盛んになったんです、台湾ですが、ところが「わらべ歌」などという言葉を聞いたのはつい最近のことなんです。だからぼくにはわらべ歌というのは非常に奇妙な言葉に響くんです。今「わらべ」という言葉がわらべ歌以外で使われているんじゃないか。翻訳の歌で「わらべは見た」と使つて、それで初めてわらべという言葉がでてきたんですね。いつごろまで使つて、いつごろから使い出したんですかね。歌舞伎などで使ってますか。

長尾 時代物では使いますね。里のわらべ、というふうな使い方です。

武谷 「子供の歌う歌」とか。古来の子供の歌、とかでいいんじゃないですか。童謡に対して。

ふじた 童謡というのは漢語的な発想だから、それに対して大和言葉の発想と対応させているんでしょうね。

わらべ歌ってなんだろう

武谷 そこがおもしろい。

田中 ロイヤルバレエとかロイヤルオペラというものが日本に全くないですね。雅楽、舞楽というところが古く中世ですね。そういう宮廷音楽があったらもう少して日本人の音楽に対する関心の度合が違つていたと思いますね。

武谷 童謡という言葉は学校唱歌に対立する言葉、身辺的な気持で歌えるということを出てきた。そして、最近童謡はつまらないもので、わらべ歌でないと日本の言葉はマツチしないというような話が出てきたんじゃないですか。

ふじた わらべ歌という名前があったかどうかは別として、歌そのものはあったんでしょうね。

長尾 ただ、わらべ歌ということがやましく言われてきて、それでは日本の本



ふじたあきよし氏

当の古来のものがわらべたちの中に残っているかという、そういうものもあるんですが、あとは流行歌の替え歌であつたり、外国の歌に日本の歌詞をつけたものであつたり……。童謡は芸術家がつつて子供に押しつけたもの、わらべ歌は子供の中に自然発生的に出てきたものと言えるでしょうね。「日本のわらべ歌」というレコードがありまして、これを私の親戚の小学生の子に聞かせますと非常に頭著な反応を示しますね。これこそ音楽だという、音楽を与えられた子供の喜びというのとはこんなものだということですね。

武谷 ひとつは遊びのリズムと関係があるんじゃないですか。言葉だけでなく遊びに付随しているわけですから、体のリズム感に關係しているということに非常に喜びを与える面があるんじゃないでしょうか。だから必ずしもわらべ歌でなくても、遊びのリズムに關係のある何かであればいいんじゃないでしょうかね。

ふじた わらべ歌と童謡との顯著な違いというのは言葉の問題なんです。日本語というのは高低のアクセントを持っていて、芸術的な歌だと無理に旋律の方へ持つてゆつたため日本語の機能自体がひずんでしまう。その点わらべ歌はそういうことなしに、日本語の機能自体が弾んで旋律になると言えますか。その辺が、洋楽の発想の歌との大きな違いになつてくると思います。

田中 そうですね。あれは発声法がずい

分西洋音楽と違っていますけど、最近の子供は西洋式発声法でわらべ歌を歌うんじゃないか。

長尾 明治以来、学校で西洋式発声法にできる限りスライドさせたものを教えますね。一方わらべ歌を歌う時は学校で教わった発声と自然に違って来るんじゃないですか。

武谷 ぼくの印象ではわらべ歌というのは、発声というより言葉、おしゃべりの続きの地声、地声発声といいますが、そういうものではないんでしょうか。

長尾 そうだと思いますね。

武谷 そうすると外国では子供の遊びの時、外国式発声をするんですか。

長尾 それはその国それぞれのものがあるでしょう。イタリアやドイツの場合はそれが芸術的発声に育って行ったので世界を征服したのだと思います。

ふじた この間、中国へ行って来たんですが、中国の芝居は日本の芝居と発声法が違うんですね。非常に鼻腔に響いて頭声が良く出て、通りの良い発声をしている。それが、小学校の休み時間、日本の「ハンケチ落とし」や「せっせっせ」などと全く同じものをやっているんですが、それを聞いていますと芝居の発声に近いんですね。芝居の発声自体が中国語の発声を芸術的に完成したものなんだという印象を受けましたね。やはりその言葉でない、どうしてもその芸術と結びつかない。その関連がきちんとつかめな

いと発声法だけ持ってきてつないでみようとしても無理ではないかと。そういう意味ではやはり日本でわらべ歌を見直すというのは、非常によくわかるんですが、武谷 そうですね。ただヨーロッパではどうなんでしょう。

例えばスペインのフラメンコの歌、あれはヨーロッパ式発声でしょうか。

長尾 いえ、あれは回教圏の発声に近くて、わりと東洋的なものだといふことですね。

武谷 だからヨーロッパでも色々あるんじゃないですか。

長尾 ええ、このごろ芸能山城組などで取り上げているブルガリアの発声、あれ

日本音楽集団に望むこと

ふじた 家元制度から日本音楽の二重構造、わらべ歌、そして発声法まで、話しておもしろく広がっているんですが、それではこの辺で音楽集団に望むことを皆さんにうかがいましょうか。

ぼくはヨーロッパ音楽的発声の楽譜に忠実にということと対置した形で、さっきも浪花節の話でできたような日本音楽のもつ即興性みたいなものが、この集団で生きないかなと思いますね。役者と仕事をしていた歌を歌わせると、自分の内側に歌がある人間と、与えられた歌しか歌えない人間にはっきり分れるわけ

は地声に近いでしょうね。

武谷 だからヨーロッパ側の色んな言葉で、子供の時どういう発声をしているかというのをきちんと調べた上で言わないと、わらべ歌は日本固有のものだと言えませんか。それからわらべ歌は小学校初学年程度で、それから先どうするか解決しないと困ると思うのです。

童謡だって昔の子供の童謡歌手はベルカントで歌っていたわけでなく、ふつうの声で歌っていたのです。大体小学校でベルカントで歌を教えているのを聞いたことがありませんがね。NHK児童合唱団なんて特別なものは別ですが。

す。もちろん、楽譜には忠実でなくても内側から歌えることが望ましいんですけど、今の音楽教育はそういう人間を育ててくれない。その点では、コードネームで好き勝手にやれるフォークなんかを通じてニューミュージックが出てきているのは、ある意味では好ましいと思うんですが、日本音楽の伝統の中に本質的に持っていたものが継承されていない思いがあるんですね。

田中 それとやはり音楽だけ切り離さないで、総合芸術と考えた方が可能性があると思いますね。日本のものは、歌舞伎

などはミュージカル形式ですからね。例えば「妹背山女庭調」などを、上手と下手に語りが並んでロミオとジュリエットみたいな話を両花道でやるような。ああいうのをもっとミュージカル風にしちゃったおもしろいと思うんですが。

ふじた 他の領域との交流ですね。

田中 総合化というか、そうするとと普及度も高くなるでしょうね。

長尾 日本音楽集団というのは純音楽をやる観点で始めているわけですが、洋楽系の教養を持った作曲家が日本の楽器に新しい表現力を与え、それを純粋に音楽的な面で活動してゆく、そういう方向に行っている面がひとつありますね。それからそうでない面として長沢さん三木さん自身の社会的視野で別の面を引っ張って行っている。ですから色々な要素を持ちながらの陣痛の時期ではないかと思えますね。

武谷 だから非常に興味がある、陣痛の時期というのはいさよおもしろいですね。ふじた あまり早く産まれない方がいいと……。(笑)

長尾 いや産まれてないとも言えませんが。非常に長い目で見ると陣痛の時期だと。それと、この間岸屋正邦さんの曲をされたわけですが、あの曲でおもしろかったのは邦楽風な序破急のようなのがあったことなんです。そこをどうも追求めてゆくと、西洋音楽とは全然別な、武谷さんの言葉を借りればそこに

日本的な論理が生まれるのではないかと。邦楽系の作曲家が日本音楽集団風な新しい理念に結びついた時にですね。そういう作曲家との提携をもっと期待したい気がありますね。

本誌 それから田中さんに伺いたいのですが、集団のように日本の楽器が色々のところから集まってきて、ひとつの新しい音楽のスタイルを作っている場合に舞台上のデザインでもっとこうしたら良いというようなご意見がありますでしょうか。

田中 そうですね。それはむしろかきかもしませんねえ。ただ日本の持つていける屏風などはたんでしまえば小さくなるし、いくつかが持つて来れば大きな演奏会になるし。非常に機能的な道具になりますね。そういうものをもう一度見直してみるとか。それと視覚的な効果でやはり装置より衣裳でしょうね。紋付はかまでも古風すぎるし、洋装風にタキシードというわけにもいかないし、そういうところにもう少し創造する可能性はあるんじゃないでしょうか。もう少し日常服にするとか。ヨーロッパのバロック以前の

音楽をやる人はわりあい日常服でやっていますよね。伝統をふっ切るということなんですよ。ぼくはブルージーンズはいて鼓叩いたりするのでもいいと思いますけどね。

ふじた 武谷さんはいかがでしようか。

武谷 日本音楽集団が、家元制度を解消することに大きな役割を果たしたらというのがぼくの一つの望みですね。も一つは歌や言葉について、新しい発声法が開拓できるかという問題があると思うのです。これは現在の特定学説や学者などにこだわらないで、独自に探究すべきだと思いますが。

ふじた ずいぶん色々とおもしろいお話がでてきたと思いますが、外から見た日本音楽、という今日の座談会のタイトル——邦楽ではなく、日本音楽といわなければならぬ、その微妙さの中に、日本音楽が置かれていられるさまざまな状況が表わされていると思います。そうした状況が今日はかなり明らかにされたように思います。注文は色々あると思うんですが、音楽集団の今後の活動に期待することによって座談会を終わりたいと思います。

★ ★ 海外旅行は名鉄観光サービスへ ★ ★

※ 夏休みカナディアンロッキーの旅 8日間 498,000円

- 出発日：8月3日(日)、8月13日(水)、8月17日(日)
- 日程：東京—バンクーバー①—車中①—ジャスパー②—バンフ②—東京
- 航空会社：日本航空
- ホテル：一級ホテル(バンフスプリングスホテル含)
- 観光：各市内観光、毎朝食、昼食②、夕食⑥

※ 秋の連休ノサイパンの旅 4日間 120,000円

- 出発日：9月14日(日)
- 日程：東京—サイパン③—東京
- 航空会社：日本航空
- ホテル：サイパングランドホテル
- 観光：半日観光、昼食①、ディナーショー①

○上記ツアーの他にも各方面に渡るツアーを企画しておりますのでお問い合わせ下さい。
又、上記ツアーに関しての日程、旅行費用についてのお問い合わせ

資料のご請求は…



名鉄観光サービス

運輸大臣登録第55号

虎の門旅行センター

〒105 東京都港区虎ノ門1-2-8

TEL: 03(503) 4151

(一般旅行業務取扱主任者 畑 幸男) 担当: 森 皓 昭

父のピアノに始まって

私の父は、宮城県片田舎で十六歳の時から小学校の代用教員で始まり、東京へ出て来てでも終生小学校の教員だった。

ナントノ 明治二十八年生まれの父親は、ピアノを弾きヴァイオリンを奏でた。子供心にわからなかった。何故この老父がピアノやヴァイオリンをひくことができるのかというのを。父にたずねてやると分った。決してモダン好みだった訳でなく、田舎の小学校に音楽専科は居なかったの仕方なくひくようになったのだと。オルガンと古びたヴァイオリンが村の学校にあったのだそうだった。道理で私が聞いた父のヴァイオリンは「モシモシ亀ヨ」だけだったし、父のピアノはいつだって弾き歌いの「はーるのうららの隅田川……」だった。それだけで、わが家の音楽が西洋音楽へと向いて行くのは充分だったようだ。私も妹もピアノのお稽古に通った。私ははじめて半年もたたないうちにバイエルと退屈さにやめてしまったが妹は続けて、結局国立音大へと進んだ。私のほうはいえ、煙草がいの癖家とはなったものの、クラシック音楽にドブブリつき、はたまたオーディオマニアなど不本意ながらもいわれるようになって、音楽なしの人生など考えられなくなった。

もし、父が代用教員をしていた分教場にオルガンもヴァイオリンも無く、横笛と三味線があった

としたらどうなっていたかしら。と、よく思う。

父は横笛の「モシモシ亀ヨ」だったろうし、三

味線の「はーるのうららのオー」だったかもしれない。そうしたら、われわれ兄弟は……。

と、考えてみると、人と音楽のキツカケというのは、ごく他愛のないものであるにしては何と根深くその後に影響を及ぼすものだろうと思ってしまう。

高校時代、同級生の父親に尺八を吹くコツを教わって、生の尺八の音色にホレホレしたもの、それ迄学校で受けた音楽教育とは余りにも結びつかず、尺八で音楽を楽しむところまで発展しなかった。けれど、音色を頭に描いただけで血が逆流する程の好もしさが残った。

寄席の世界に入って、三味線の音色を知り篠笛の音色を知り、メ太鼓、大太鼓（おおど）、鉦の叩き方を教えられた。邦楽器のメロディやリズムに初めは戸惑った。リズムやメロディは、今迄の音楽の頭ではすぐには納得いかなくても、個々の楽器の魅力は感覚に訴えるかどうかだけのことだったから、理屈がどうこうでなくたちまち好きになった。

日本人のすべてが自分と同じ感覚を持っている



柳家小三治

と迄は思わないけど、日本人ならこれらの楽器の音色（当然オンシヨクとは読まずにネイロと読んで下さったでしょうが）にまいってしまふ筈だとその時思った。と同時に、ピアノにしろヴァイオリンにしろ西洋楽器で音色を聞いたとたんに、アッこれはオレの音楽だノとホレ込んだ楽器はそれ迄無かったことに気がついた。深味というか雅味というか、なんて素晴らしいんだろウアアおれは日本人なんだノとつくづく思ったものです。

そのころからです。何故日本の音楽教育というのは邦楽器から入らずに洋楽器から入るのだろうか疑問を抱くようになったのは。

変だと思えます。日本人なのに西洋の音楽を作って、そこへ邦楽器をバラバラと混ぜて、ヤッタノとか、ドウダノとかいっているのは。

逆じゃないんですか？ 日本の音楽を作ってそこへどう西洋の音楽を取り入れたかを云々する方が本筋ではないでしょうか。

などと、明治維新にさかのぼる日本の音楽教育の発端の是非を論じた所で始まらないのは百も承知の上。でも幼稚園や小学校の時分から邦楽器に親しませる位のこととは出来る筈でしょ。何かのカニバルに出て来る少年小女鼓笛隊に、篠笛が混じり、ドラムばかりでなく桶鼓や大鼓、それにチャンチキが混じるなんてえのもうれしいじゃありませんか。

ませんか。それじゃ音楽のバランスがとれないというのなら、バランスがとれるような音楽を作曲するべきです。

何かというに出て来るスコットランドのバグパイプ。これはオレたちだけの楽器だと誇らしげに吹き鳴らす彼らを見てうらやましいと思うのは間違っているでしょうか。

(落語家)

思いつくまま

地方文化と邦楽

○地方文化ということ

地方の時代だという。地方に住むものにとつて、地方ということばには、いろいろの思いがこもる。もともと地方というのは、中央に対置することばだ。ここには、政治的なもの、権力的なものが介在する。地方自治体、あるいは地方政財界ということばはそれを意味づける。政治的経済的な面ばかりではない。それは文化・芸術の面でも立ちあらわれてくる。中央文壇とか中央画壇というとき、暗に地方文壇とか地方画壇が意識されている。音楽界でも、地方在住の演奏家などという言われ方がある。地方というとき、そこには必ず低さ、立ちおくれの意識がまといついている。言ってみれば、一流と二、三流ということであろうか。

地方文化という言葉が使われ出してから、ずいぶんと歳月を経た。が、このことばほどあいまいなものはない。結論的にいえば、中央文化ということばがないように、地方文化というのはいないと思う。実在するのは地域文化であって地方文化ではない。地方の時代というからには、地方とか地域とかいうものの概念規定を厳密にしておか

ないと、論議は正確に進められないように思う。

○三重県邦楽祭のこと

三重県では、三重県文化会館が主催して、邦楽協会加盟の団体の出演を得て、「三重県邦楽祭」を、毎年秋、開催する。十年を経過して、この催しは定着した。邦楽祭は第一部と第二部とに分れていて、第一部は協会会員の演奏。第二部は日本を代表する著名の演奏家による特別演奏。邦楽協会といっても、箏・尺八のみで、他の分野の邦楽は入っていないのだが、この協会員数百名が多様なプログラムで演奏会をくりひろげる。華やかで大きな邦楽の演奏会、そして邦楽の祭典。出演者——とくに小さな社中の人たちは、年に一度のこの邦楽祭を心待ちにするという。会員数、百名に達するというような大きな社中は、数少ない。大きな社中は毎年のように単独で箏曲演奏会を開く。その力のない小さな社中は、二、三の同系の社中が合同で小さい会場でささやかな演奏会を開く。あるいは市民音楽祭などの中でプログラムの一つ



を受けもつ。したがって、この邦楽祭のような華やかな大きな演奏会に出演できるというのは、小さな社中にとっては、主宰者ばかりではなく、子弟の人たちの大きな喜びとなっていると聞く。地方における文化行政の視点からいえば、単独で演奏会を開催できる大きな社中への支援ということよりも、こうした小さな社中への「てこ入れ」といったことに、重要性があるように思う。

○社中のこと

邦楽の社中というのは、茶道や華道の家元制度に似ている。地域に師範がいて、中央に家元がいて地域の師範を統制する。ここに中央と地方の関係が動く。この道の奨励ということからいえば、これはこれで意味のあることだが、弊害の面を見すくすわけにはいかない。師弟関係が終世つきまとう。これは、地方の小都市に行けば行くほど厳しい。小さな町では、親子ぐるみ、親類ぐるみの関係ができる。社中のなかから優れた演奏能力のある人が出たとしても、同じ地域内では別に一門を作ることは許されない。まして流派との縁を絶

堀川憲二

ち切って、演奏家個人の名で一門を作るなどは思
いもよらないことだ。他の地域に移るか、思いき
って大都会へ出るしか方法がないという。陰にこ
もった制裁を怖れるからだ。

また、演奏面からみても、いわゆる「先生」の

お気に召さない曲をプログラムに取り上げること
は許されない。意欲的な主宰者の社中では簡単に
進むことが、古い型の主宰者のところでは、難問
題なのだ。社中の問題ひとつとりあげてみても、
地方にはいろいろのことが山積する。それを一つ

一つ乗り越えなければならぬときに、地方には
言い知れぬ苦しみがあるようである。

(三重県文化会館次長)

西川浩平笛リサイタル

三つの小品／林光作曲 フルートとピアノのためのハツナタ／別宮貞
雄作曲 フルートと二十絃箏による八ひなぶり／三木稔作曲 笛と打
楽器のための音楽／八坂健一作曲 REQUIEM／福島和夫
作曲 古典長唄囃子より／八乱序・狂い五段
賛助出演：ピアノ・久保節子 箏・野坂恵子 和打楽器・堅田喜三久・

尾崎太一・篠倉成敏

六月二日(月)東京 芝・ABC会館ホール 六月九日(月)大阪 堂
島・毎日国際サロン 午後七時開演 入場料：一五〇〇円
東京・日本音楽集団四〇九・五三七四 大阪・フィル二二一・七四五〇

田嶋直士第一回尺八リサイタル

鹿の遠音／琴古流本曲 竹籥五章／諸井誠作曲
アキ——二つの尺八のための／広瀬量平作曲
産安／海童道曲 ひなぶり／三木稔作曲
賛助出演 横山勝也(尺八)・野坂恵子(二十絃箏)

五月二十三日(金)七時 青山タワーホール(地下鉄外苑前下車)

入場料：一七〇〇円 入場料：一五〇〇円 入場料：一五〇〇円
お問い合わせ 日本音楽集団四〇九・五三七四
田嶋方〇四六七・四五・六四八二、〇七二二・三六・二四二三

琴造り

くらもち

十三絃
十七絃
二十絃

龍勝

いとしめも致します

千葉県柏市豊住五ノ二ノ二十一

電話〇四七一・六三・三八六四

歌楽帖 5

オペラへあだゝ初演日誌

三木 稔

前号で、オペラへあだゝの歴史と称して私のオペラ第二作についての作曲の経緯と、ロンドンにおけるリハーサル初期のことに触れた。今号ではリハーサル後半と、初演の様相について報告する。

ロンドン南部、ケニントンにあるアルフォードハウスの稽古場では、立稽古の始めから、大きな障子十六枚を合理的に組合せた実際の舞台がセットされていた。日曜を除く毎日六時間、綿密な稽古が行われたが、指揮のステュアート・ベドフォードが不在の折、二、三度、自分で棒を振られる羽目に遭った。テンポや間合い、いろいろといったものは、自分の体で表現しつつ、演奏を誘導するほうが、作曲家の心根を伝え易いことは確かである。演出のコーリン・グレアムと、練習ピアノを弾くジェフリーや歌手たち、それに合唱指揮のトムから、間や感情のこもり方がよく分った、と喜ばれてホッとする。

BBCテレビのメインストリームという番組が丁度取材に来た折には、一寸恥かしいような顔の表情まで、録画されていた。

九月二十日、日本を出発するまでに仕上らなかつた矢崎明子さん委嘱の八紫の

譜がやっと完成。安心して、コロシウムにイギリス国立オペラ(ENO)のシンデレラを聞きに行く。それはコーリンの演出で、愉快なメロドラマだった。実はこの新演出は、七十六年にEMTで行ったものだが、へあだゝ初演に足す資金を得るために、約五百万円でENOにセット込みで売ったものだそう。ENOとEMT両方の推進役のコーリンとしては、何とも複雑な立場であろう。

二十二日はそのコーリンの誕生日。いたずら好きのジェフリーの発案で、序幕のお経によるハッピー・バースデーの唱和が、四十八歳になった大演出家を迎える。私より前から参加していた花柳錦之輔

氏の話では、立稽古のはじめから全員完全暗譜だったそうだが、唯一人終始覚えることに苦しみ通した男がいた。歌の雪之丞役の名テナー、ケネス・ボーエンで、私と顔を合すたびに、アリアの一節にある、*Memory of time* (記憶が残る)を歌い、自分の頭を指して、さかんに

stupid (馬鹿)、というのが痛ましかった。そういいながら、結局本番は見事に歌い通したウェールズ出身の素晴らしいテナーノ

歌う雪之丞に対し、踊りとマイムを専門に演ずる雪之丞IIがいる。ロイヤル・バレエから来ているステイヴン・ジェフリーズという男っぽいダンサーだ。女形としては顔のほりが深すぎて、日本人の既成の女形観からは遠いが、錦之輔氏からとれるだけのものをもって見事に雪之丞を形象化していく。鶯娘の踊りにしても、回転などの部分は、とても日本人がおっつかない美しさでこなしてしまう。

もう一人、平馬役のトム・マクドネル。ドンタッポのリズム形による大時代の立ち廻りだが、錦之輔氏が、彼の無器用に泣かされながら、体を張ってコーチした甲斐あって、二ヶ所の見せ場をステイヴンと果し終えた。

こうした侍役は、体のある彼らがやること、まことに堂々として、後日舞台で扮装して演技した姿は圧倒的でした。土曜三奇役のマイケル・パウアーなど、その間死のシーンは大往生といった趣きがあり、バス・バリストンの強い声と共に、

つい日本の歌舞伎やオペラと比べて羨ましく思ってしまったのだ。

あと二人の悪役、川口屋のポール・ウィットマーシュ、広海屋のリチャード・ス

トリート、菊之丞のグリーン・ダウンボートといった歌手たちも、実に適材適所というか、コーリンやステュアートがよくも選び切ったものと感心すると同時に、それだけオペラに関しては、日本より層が厚いんだな、と思わざるをえなかった。

たった一人の本当の女性、浪路のマリー・スロラック。「決して大女は選ばぬように」と私の注文がコーリンの頭にはしみついてたよう。スコティッシュ・オペラに属する美しいソプラノ。マリイを聞いたあとでは残念ながら、日本で浪路役に直ちに推せるソプラノを発見できない、との声がしきりであった。第一幕

第八場のアリア、*Spring comes to my bed* の哀切と、第二幕第四場、霞の隅田川べりを狂ってさまようシーンのすさまじさを、あわせ表現できる理想的なソプラノを、初演で得たことの嬉しさ。

明日は日本から演奏者たちが着くという日曜日。ブリトワンの故郷で、毎年六月フェスティバルの行われているオールバラに近いオーフォードのコーリンの家を十数人で訪問する。ロンドンから東北東に車で四時間。イングランドの陸地は天国のように美しい。コーリンの家の庭に

寝転んだり、ブリトクソンの墓を訪れたあ

と、北海の岸で歌手たちと石投げして遊ぶ。田園は、突如荒涼たる暗色の海に落ちる。カーリー・リヴァーのモデルになったオールド・リヴァーも、九月というのに暗く寒く、彼らが棄いた美しい田園が、決して自然天賦のものでないことを知らせてくれる。

ピアノの響きは、まさしく彼らの創られた田園と同じである。実は、二週間にわたってジューフリーの美しいピアノによるリハーサルを聞きつけてきた耳には、このまま邦楽器を加えない方が、このオペラには向いているのではなからうか、とさえ疑われるのだった。もちろん、当初邦楽器なしにデクサンされたせいもあるが、日本の変化の多い自然に似せた邦楽器の音が、ヨーロッパの切りとられた人工の芸術の場とは、単純には相容れないものであることが痛切であったことを告白せねばならない。

日本からの珍客たちは、九月二十四日夜ヒースローに着いた。二十絃・野坂恵子、三味線・今藤小苗、打楽器・高橋明邦、自費参加の琴光堂中島隆、それには非この初演を確めたいと来られた評論家木村重雄（各種資料、そして募金にまで助力を頂いた）、三浦淳史の両氏である。更に数日遅れて、八春琴抄以来の木村藤氏や、私の妻・妹・義兄たちも参加し、ロンドンにあだな部落が一つ出来

上ることになった。

ピアノに充足していた私の耳は、おずおずと再びこの愛すべき日本の響きたちに戻っていった。批評がいみじくも述べたように、やや騒がしい日本の楽器たちは、急速にこのオペラの響きを定常化していった。今では、英国人の方が、これらの楽器なしに八あだを考えられないらしいからおかしいものだ。

九月二十八日、オーケストラが初めて音を出す。邦楽器を加えて十二名のコンパクトな室内オーケであるが、普通のオーケメンではなく、個人でソロ活動をしているソリストだ。そうだと判り易い表記によったとはいえ、私の表現法や癖の説明にやはり時間がかかる。練習に借りたホルの残響が多すぎて、細かい音が聞えず、疲れる。この日は、三時間かけて一幕の途中までがやっとだった。次の二十九日に、一幕の残り二幕を一応当ったが、記譜上の問題で、キーに委ねる部分の扱いが、やはり時間を喰う原因となった。但し、馴れた後では、適切なキーは、間の画一化を防ぐ上で有効で合理的ですらある。

この日のオーケのリハーサルから、いよいよ訓練の場はオールド・ヴィクト劇場に移った。私たちは、約二週間、ウオーター・駅に近く、やや殺伐とした交差点に面しているが、内は小粋なヴィクトリア朝ムードの劇場に腰をすえること

になった。劇場周囲には、やっと間に合ったボスターが百枚ほど貼られ、入口のブッキング・オフィス（切符売場）では、劇場の人たちが、チラシから切り抜かれた浮世絵のバッジを付けてニコニコ笑う。借りたホールという感じでなく、自分の小屋で自分のオペラをうつ、何とも爽快な夢がちょびりうつつになってきた。しかも、ここはロンドンなのだ。

オーケのリハーサルの間、歌手たちは衣装やメイクアップの準備、そして演技の流れをよくする通し稽古を、ピアノで練習していた。日刊紙に、そろそろインタビュー記事やアーティクルが出始める。各紙共、アーツ・カウンシルがEMTの次年度補助を止めたことをナンセンスといひ、八あだが最後の賭だと報じている。私は、えらい時期に登場した作品提供者なのだ。

九月三十日、私の作品のみによる野坂恵子第二回ロンドン・リサイタル。ウェストミンスター寺院の近く、スミス・スクエアにある元教会を改装したセント・ジョンがその会場。プラタナスの落葉に囲まれた閑静な一角で、月末の日曜という悪条件下に、果して客が来てくれるのか、実はオペラ以上に心配していたのだが、郊外に行かなかった約三百の客が、舞台に近い方から席を埋めていくさまにホッと胸をなでおろす。八あだの曲、

八天如のソロ、ドビング氏のフルートとの八ひなぶりという前半から客は熱く、決して演出したわけではないのに、各曲とも野坂は二度ずつ舞台にひき戻される。後半は舞台初演の八あだから、そしてコリンの語りを加えた八まぼろしの米では足りなくて三度だ。客席の端にいる私を作曲者と気付いた客たちが流し目を送ってくる。終りに八華やぎ。そしてアンコールは、これだけと予告して二つ。一人の日本人が、西には未知に近い楽器で、全夜にわたって彼らの心を占め続ける。野坂にとつてはもう何度か体験のある光景だが、西洋人たちは、何とレセプションのうまい人種だろう。こうして彼女の全能力を見事に引っ張り出してしまおうとは……。

十月一日、いよいよその月になった。午前・午後に分けて、歌手とオーケによるジップ・プロローベ、要するに動きを付けず坐ってのリハーサル。やはり響きがつきすぎた部屋のために疲れる。

夜は、このオペラを出版するフレイバー・ミニジック社の社長ミッチェル氏宅に、業界の有力者を招いてのパーティー。皆な八あだに興味をもって聞きにくるという。

十月二日、舞台稽古はじまる。セットやライトに意外に時間を喰って、全てが整わぬまま音が出る。しかし三日間は舞台稽古をやるのだ。同じ金がないとい

っても、これだけは伝統の慣習の差であ
ろうか。日本は改めねばならぬ。

十月三日夜の全幕通しで、やっと恰好
がついた。フェイバー社のミツチエル社
長とキングスバリー氏が、ひどく心
を動かされている。音楽は、音楽だけの
稽古のときよりも反って集中しているば
かりか、演劇的行為が、音楽をより高い
次元に昇らせている。こんなことがあり
得るのだ。コリンは、真のオペラ演出家
というべきであろうか。私は、この大切
なチャンスに、何という得がたい協力者
を得たのだろうか。

客の入りも、少くとも初日は一杯にな
りそうだという。

十月四日。公開前夜。参考用のビデオ・
テープを廻す。ステイヴンが引き抜き
の準備を間違ったり、全体にこまごまと
したトラブルがある。いいのだ。前日は
そういったものを全て吐き出すのだ。

夜は、歌手たちは舞台の上に坐り込ん
で音楽上のダメ出し。自信のあるベース
だなあ、と少しばかり溜息が出る。

十月五日。その日が来た。昼過ぎ劇場
に行ってみる。コリンたちが「ナーヴァ
スだ、ナーヴァスだ」といっている。あ
がっているというのだ。そうかも知れな
い。七年前私に依頼の手紙を出したコリ
ンだが、私は何度も引き延ばしたし、「本
当にこのオペラが出来るとは思ってなか
ったよ」と先日述べた彼だ。他人の名

になっているが、装置も照明も全て彼の
オリジナル・プランだし、マネージメン
トの重要な部分だってコリン・グレアム
なしになかった。「七年だ」「七年かか
ったのだ」といっている彼が、今日を迎
える感懐は、ぼく以上であって当然だ。

私はどうなんだろう。その日の手帖に
は「長く、永く、人々の心を慰す素敵な
演し物になることを信じて初演を待って
いるだけだ……午後スコアのリライト
に費やす。これだけ書いたんだし、皆な
も一生懸命やった。必ずうまくいく。」
などと記してある。

日本では知らなかったが、初日の風習
がある。開演一時間くらい前の楽屋は活
気があって、替わる替わるスタッフやキ
ャストの連中が他の部屋に届けものをし
ている。私の机の上にも、心暖かい挨拶
のカードが山をなしていた。

開演は十分遅れ、七時四十分頃だった
ろうか。昨日まで、冒頭の僧たちは説経
しながら仮花道を登場していたが、私の
唯一の注文で、ドラと鉦だけの響きの中
を無言で登場するように変更してもらっ
た。当然、私たちが集団でやっているね
とりのような雰囲気を持ち込まれた。ブ
リトゥンの教会オペラの亜流といわれる
こともなくなったと思う。一幕充足。

幕間は恒例のワイン・ブレイクだ。ス
ペンシャル・ゲストの集まる部屋に私たち
は招き込まれ、強い好奇心とやさしい声
援の囁みに十数分を過す。そして、予想

通り二幕も完全に近い出来で、はねたの
は十時半に近かった。舞台稽古のあいだ
気になっていた外の騒音も、今日は不
思議に少なかったように思う。

ブリトゥンが生きていたら……と皆な
いつてくれる。歌手たちは、口々に「こ
のオペラを百回は歌いたい」と私を祝福
しにやってくるのだった。

十月六日。二日目。入りが悪い。この
日はまだ批評も出ず、宣伝不足がここに
集約して出るのは避けられなかったのだ。
出来も、ある部分で落ち着きが出てよく
なり、ある部分でミスが出た。終演後、
私の招待で劇場内ロビーでパーティーを
行う（十三日にも、サントリ・レスト
ラン協賛で宴を行った）。立錫の余地も
ない沢山の客人たち。EMTの他の一本、
モーツァルトの *The Furies* *Giardiniera*
で主役を歌う美しいソプラノ歌手がハ
あだへの愛情を、初々しく告白しにきて
くれたのが記憶に新しい。錦之輔、小苗
さんたちの入智恵で、ハあだの出演者か
ら私へのプレゼントとして、ハンドメイ
ドの硬式ラケットが贈られ、びっくり。

十月七日。ハマスミス地区のリヴァ
ーサイド・スタジオで日本音楽と踊りの
夕べ。これは最初、野坂リサタルのた
めに確保してあったものだが、せっかく
オペラのためにははるばる日本から参加す
る皆に出席を作らうと、野坂と相談して

変更した。振付や衣装・メイクアップの
指導に献身してくれた錦之輔氏の美しい
素踊りを披露したり、今藤、高橋両名の
妙技も公開できたのが何よりだった。コ
リンの希望でハまぼろしの米を再演し
たが「小さなオペラ」「お前は偉大なド
ラマティストだ」と、反応が物凄いい。

八日。ロンドンの三大紙に一齐に批評
が出る。あとの入りに響くので大変気にな
っていたのだが、総じてよい。コリン
からの今年の手紙では、私の帰国後に
出た十以上の評も、ある日隔紙を除いて全
てよく、その一人も「自分の慣習を合
わすことができてミスをした」と認め
たそうで、完勝だと書いてきている。

ところで、少い紙面ゆえ、行動をはし
りて書いているが、残り少ない滞在と
なってやけに忙しい。この日は、ケネス・
ボーエン家に招待されている途中抜け出
し、ロンドンに住む日本人たちの集りに
出席してレクチュア。それを終るとオケ
の連中に呼ばれ日本レストランで会食。
彼らの話では、オケ・ボクスの中では
いつも冷めているのに、今度は楽しくハ
ッスルしているという。

九日朝、錦之輔氏帰国。私や中島はB
BCの八等ヴァルチュオーゾという番
組にソロ録音する野坂に同行。午後は著
名な中国学者アイザック・ドイッチャー
氏の未亡人タマラさんの招きに応ずる。
夜はハフィンタムを見にオールド・ヴィ
ックへ。なお、BBCは、この日、九月

に取材した練習風景を放映した。

十月十日。午後、ミツチエル氏宅で詳細な出版打合せ。英語・日本語とあわせ、ドイツ語も加えることになる。この日本版制作に、帰国後相当時間を喰いそう。オペラ一つを軌道に乗せるのは全く大仕事だ。更に、このミーティングの際、八十一年のオールドラ音楽祭でビーター・ピアーズの歌う歌曲の作曲を求められる。

今夕は八あだ初演第三夜。批評や口コミで俄然入りがよくなるという情報なのに、開演前の客の出足がよくない。あとで聞いた話だが、コリンも客席を歩いて淋しい想いをしていたという。彼は四日間とも、公演中客席の後ろに立ちっぱなしだった。日本音楽集団での私たちを想い返して同感する。客の出足の悪さは、小雨による交通混乱にあった。それにも拘らず大衆席は早くから満ちた。批評の威力をまさまじと知る。日本でも、自分の劇場、いい企画と演奏、適正な新聞批評、そしてロングラン、という図式にオペラや集団の公演をのせたい。

十一日。昨夜は、返り初日という趣きで、いくつかミスがあった。雨で、声も楽器も、心なしに鳴りが悪かった。コリンが、マイケルとコーラスに二日間の特訓を命じたという。トラブルのあった装飾を改めるのに今夜は美術班は徹夜だという。「この作曲に應えるために皆で死力を尽そう」といったそうだ。

夜、ミュージカルハシカゴをみたあと、ソーホーの路上でばったりとコリンに出会う。グランドボーン・オペラの、人を賞めないで有名なディレクターから、たった今「この二十五年間で最高のオペラだ」といわれたと聞き、居合せた仲間たちと共にしやぐ。オクスフォードから十二月に二回の上演を申し込まれたことも聞く。しかしブラス・アルファの資金が問題だそうだ。

十月十二日。美日。初日に似た胸の高鳴り。通訳で大活躍してくれた小林あかきさんと相談してバラの花を買い、出演者の楽屋に届ける。皆な高まっている。劇場入りの前、集団の次回公演のマネージを受入れたハロルド・ホルト事務所を訪ねて担当のステファン・ライト氏と打合せたり、BBC内のNHK支局から日本語放送のインタヴューを受ける。そうそう、今夜はBBCラジオの中継録音がある。二日目からずっとテストを繰返しているから、きつといい録音ができるだろう。

午後から劇場前に人の列が出来始めた。開演前はこたえ返して、立見の申込みが殺到している。「あと何日かやりたいなあ」と誰かともなくしみじみした声が出る。評判をききつけてきた人が多いから、客席も活気がある。十五分以上も遅れたであろうか、幕代りの提灯十数個がツツと吊上げられて開演。

プロログで、主任の僧が雪之丞を打つ瞬間、数珠がバラバラに飛散る。ハッとすると、それがゲン直しになったのか、高潮した好演のまま二時間半を終える。毎回、イギリス人たちは涙をぬぐった。静謐な最終空間の中で、聴衆は声を出せない。拍手は長いクレッシェンドをたどり、主役の紹介のあたりからブラボーが爆発する。日本からの三人の演奏家にはひときわ高く、私が出る頃には重層して渦をなし、何度も前に押し出してくれる歌手たちの暖かい心が本当に嬉しかった。異国での初演で、こんなに迎えられるのだろうか。

さて、私が作曲をした衝動にかられる原因の多くは、今日の社会の中にある。それでは、私の作曲技術はどこからくるのかと問われるならば、音楽とは直接繋がない自然の推移や、人間社会の因果関係といったものが私に乗り移って、音符の形を決めさせる、という風に答えるのが一番近いかも知れない。太陽と大地の営みのおこぼれを頂いているのだ。

オペラ八あだAn Author's Revengeは、英語台本により、江戸時代の物語に架空し、遠いイギリス人たちによって上演されるために作曲されたわけだが、英語にも、江戸の風習にも、イギリス人の方法にも疎い私が、短期間にそれらに習熟できるわけもなかった。キングスバリー氏

が指揮するように、十七世紀初めのモンテヴェルディが打ち立てた理想的なオペラのスタイルを回復したとか、EMTと由緒あるためにどうしてもお手本とされるブリトゥンとの類似性が賞められても、不勉強な私は目を白黒させるだけだ。しかしコリンが「三木の音楽は他の誰にも似ていない。ただ、共に独創的である点でブリトゥンと似ている」と常に語っていると知った時は、無上の光栄と思った。家族が喰い、日本音楽集団などが生きて活動するために必死に膨大な時間が、私をこいう特別な作曲家に仕立てた。英国人におもねずとも、人間として自然に添ってあれば英国人の理解する音楽は創れる。英語によっても、日本語で培った旋律線は生きる。過去のオペラについての知識はなくても、客のいる劇場空間を知覚しつつ、太陽と大地の営みに従って作曲すれば、共感の得られるドラマが生れる可能性はある。

とはいえ、私は少し不勉強に過ぎる。打ち上げの夜、コリンやEMT全員からの最後のおみやげとして、ブリトゥンのオペラの全スコアと全レコードが私に贈られた。彼らが世界に誇る作曲家のことを、私に少しは知って欲しいという願望であろう。コリンと私は、もう次のオペラ作曲・上演の準備を始め、フェイバーはその後押しをしてきているが、その前に、この大先輩の音楽にじっくり耳を傾ける時間を持ちたい、と切実に思う。

お琴・三味線

品質の優秀さ
価格の安さに定評がある
琴栄楽器店



弊店二階展示場

〈お 琴〉・常時在庫200面・試弾できます。
・特別注文仕上げ受承ります。

〈三味線〉・在庫多数・試弾できます。

お琴・三味線のお買求めは琴栄ローンで(最高20回払い)

琴

御琴・三味線専門

琴栄楽器店

〒500 岐阜市司町九(大学病院前)
TEL (0582) 63 1826・64 1261

パンフレット無料送付致します

58 春の総合定期演奏会

Regular concert: Works for solo, small ensemble and large ensemble.

五月八日(木) 午後七時開演
都立センター・ホール

一、雨の向うがわて 池辺晋一郎作曲

〔打楽器〕尾崎太一・藤告成敏・堅田啓輝・高橋明邦

二、春響(初演)

佐藤隆作曲 本年度日本音楽集団作曲公募第一二位入賞作

〔笛〕藤崎重康 (尺八Ⅰ) 坂田誠山 (尺八Ⅱ) 三橋貴風

〔琵琶〕田原順子 (十七絃) 宮越圭子

〔指揮・打楽器〕井上道義 (打楽器) 前田文男

三、みち——日本楽器による八人の奏者のための 長沢勝俊作曲

〔笛〕藤崎重康 (尺八) 宮田耕八郎

〔三味線〕藤田司郎 (琵琶) 半田淳子

〔箏Ⅰ〕砂崎知子・内藤洋子 (箏Ⅱ) 坂井敏子・津田美智子

〔箏Ⅲ〕吉村七重・熊沢栄利子 (十七絃) 宮本幸子・本巢雄志子

〔指揮〕井上道義

雨の向うがわて

日本音楽集団の打楽器と笛のメンバーによる「ぐるーぶ・だだ」が結成された二年前の旗揚げ公演にこの曲が演奏され注目を浴びました。メンバーの一人である藤告成敏が、大学時代の同級生である池辺晋一郎に委嘱してできたもので、六月の雨の多い季節に書かれました。

「雨は降り、そして必ずやむ。雨はドラマを作り、ドラマを閉じる。雨は飛ぶ。雨は走る。雨は語る。屋根瓦にしみてゆく。そのしみかけの、数滴の、降り始めの雨跡の描いた絵を、好きだ。福田平八郎の絵である。雨はそのように跡をつくり、そして消える。雨は、だから、はかない。他方で、石をも穿つほど、強い。この作品は、雨の季節に書かれた。雨の向こう側へつき抜けようとして、ぼくは、雨のただなかを、通っていた。」 (初演のプログラムより)

四、東から 三木稔作曲

〔二十絃箏独奏〕野坂恵子

五、巨火

三木稔作曲

〔笛〕藤崎重康

〔尺八Ⅰ〕宮田耕八郎・田嶋直土

〔尺八Ⅱ〕三橋貴風・米澤浩 (尺八Ⅲ) 坂田誠山・竹井誠

〔細絃三味線〕藤田司郎・加藤洋 (太絃三味線) 坂井敏子

〔琵琶〕半田淳子・田原順子

〔二十絃箏〕野坂恵子・吉村七重 (十三絃箏) 砂崎知子・花房はるえ

〔十七絃〕宮本幸子・宮越圭子

〔打楽器Ⅰ〕I・堅田啓輝 II・藤告成敏 III・尾崎太一

〔指揮・打楽器Ⅱ〕井上道義

客演指揮 井上道義

この作品では、ラテン楽器のカバサ、ギロ、マラカスト、和楽器中心とした金属製八種、木製六種の打楽器を、四人の奏者がそれぞれ六〜七個受け持ち、声を加えて合奏します。カノ シュー、シモノ ジャー……などの威勢の良い単音による掛け声がこの作品を一層盛り上げています。 (鶴野記)

□作曲年：一九七八年 □初演：同年、ぐるーぶ・だだ第一回公演 □委嘱：ぐるーぶ・だだ
□演奏時間：十分 □楽譜編成：打楽器4

春響

私は以前から単純な機能しか持たない数本の横笛を中心とした音楽を書きたいと思っていましたが、そのためのきっかけをつかめないうちに今日に到っていました。しかしこの二月、「ブリジット・ライリー」の絵に接して、ようやくその糸口を得、

この曲を書くに到りました。

そこでは平行線が横状に組み合わされておき、さらにこの平行線群は波状をなしてゆらめいている。そしてそれらはやがて、組み合わされた色彩の対比と繊細な構の構成により光学的効果をも示し、ついには色彩の幻惑の中で光を放ち輝きゆらめいていく。

曲は序と六つの段から成り、一本の篠笛と二本の尺八を中心に琵琶、十七絃、それに打楽器2を加え奏されます。打楽器は余韻の長短により二つのグループに分けられ、琵琶、十七絃と共に三本の笛と対峙し、響きを構成していきます。

題名の「春響」は作品を書き始めた時期とライリーの絵に出会った時期が「立春」を迎える頃であったことに関連しています。

(佐藤隆)

みち

これは日本音楽集団研究団員の一期生八名の新人演奏会のために書かれた曲です。一連の長沢作品のアンサンブルにみられる、親しみやすい素材であたたかい心情がこの曲にも感じられます。一つの楽章からなっており、哀愁をおびた尺八ソロから、篠笛、箏、十七絃、三味線、琵琶へとテーマが受けつがれトクティに移るところは恰も一人一人の奏者が寄り集まってきて道をきり拓いてゆくようです。

一期生にとっては希望に満ちた門出を思い起こす曲ですが、今日までの道のりは決して平坦ではなかったことでしょう。現在の集団は大きな飛躍を遂げたわけですが、これまでの道程は想像以上の地味な努力がありました。集団が力強く、未知の道を進んでゆくよう、作曲者は願って書いています。

(鶴野記)

【作曲年】一九七三年 【初演】同年、第一回新人演奏会 【演奏時間】十一分
【楽器編成】篠笛、尺八、琵琶、三味線、箏、十七絃（今回は箏と十七絃がダブルです）

東から

三木稔の箏独奏作品は、八天如や八佐保の曲、八竜田の曲のように伝統とは何かを問いつつ箏の可能性に挑み続けている作品系列と、八箏詩集のような親しみ易い系列の二つがある。前者の系列は八竜田の曲以来七年間作曲されていないことから、八東からVはこの数年間の作曲者の音・思考が吐露されていると推測される。

曲の前半は十二平均律から外れ、インドネシアの音階からヒントを得た調絃で、ところどころに微音差をもった絃を配置し、ガムランの響きを出した着想が秀逸

である。夕陽も東からやって来るムードがある。移行部を終って後半は、八橋検校に敬意を表し、一歩下って、五段の調べで、昇る太陽の精気を表現している。独奏者野坂恵子の魅力を音化するによりアジアの東から発せられるメッセーは単なる音楽を超えて呼びかけてくる。

「資源は少ないが、古い文化と美しい自然を持つ国の音楽家の果すべき意志が、表現のそここに聴き取れるなら幸いである。」——作曲者

(霜島記)

【作曲年】一九七九年 【初演】同年八月にカメラータ・レコード録音、九月に第二回ロンドン・サイタルで世界初演、十二月に第八回野坂恵子・リサイタルで日本初演（いずれも野坂恵子による） 【楽器】カメラータ・レコード 【演奏時間】十二分 【楽器編成】二十絃箏独奏

巨火

日本音楽集団の舞台の大きな魅力は、その演奏する音が生々しい、人の声であるということ。これは特に、日本の一流のプロ合唱団やオーケストラが遠い昔に忘れてしまった音楽の命とも言えるだろう。そして、集団が過去七回の海外公演にも成功を収めてきた理由のひとつであらうし、今日共演する、世界を駆け巡って権をふり続けている井上道義氏を捉えた魅力であると言えよう。

この、人の声、を一杯にふれ持ち、それを音と言葉で自在に表わすという魔術を操ることのできる稀有な作曲家、三木稔の巨大な産物「巨火」。それは「かくら1976」に生れ、海外で、日本各地で燃焼を重ね、今、新たに集団の持てるものすべてを集約した看板音楽になりつつある。

前半は、火の塊のような響きのあと能管に導かれての、祀りが儀式的に始まり、各楽器が独奏風に次々と現われ厳密な雰囲気を高めてゆく。つい体を動かしたくなるようなスケルツァンドな中間部を経て、第三部では、二十数名の奏る日本の楽器が大挙して秩父屋台囃子へ参加、祭りが繰り広げられる。そして、聞く者を「ただ聞くだけ」にさせておかない興奮の渦へと巻き込んでゆく。

尚、今回は客演の井上氏が指揮を兼ねて打楽器の4番を打ちます。

(霜島記)

【作曲年】一九七六年 【初演】同年第三十七回定期会から1976 【演奏時間】二十八分三十秒 【楽器編成】箏2、尺八3、胡弓、三味線2、琵琶2、事、打楽器4（今回は尺八がダブル、三味線1がダブルです。）

*各演指陣の井上道義氏のプロフィールは21ページに掲載されています。

59

定期演奏会 胡弓特集

Regular concert: Kokyu music: past, present, future.

六月十日(火) 午後七時開演 青山タワー・ホール

構成 畦地慶司

一、ゆき

二、壇浦兜軍記の阿古屋の琴責めの段より(三曲の胡弓のみ)

三、鶴の巢籠 藤植流胡弓本曲

四、新三段獅子 畦地慶司編曲

五、胡弓と箏による二重奏「春籟」 畦地慶司作曲

六、胡弓三章 牧野由多可作曲

客演 山田広代(胡弓)・矢崎明子(歌・三味線)

日本の胡弓が史料によく現われるのは、十七世紀に入ってからで、文献や挿し絵によってその存在が知られます。また浮世絵にも描かれ、文字についても小さき事として「小弓」或いはそれとは別な「数弓」または、「胡弓」という漢字が使われ、平仮名では「こきう」等と書かれております。今回の演奏会は、この日本で唯一の撥弦楽器の妙味を堪能して頂くよう企画しました。

胡弓は古く三曲合奏の一員として活躍しており、従って多くの古典曲も伝承され独奏による曲も幾つかあります。それらの中から当日は、代表的なものをと考え、特に四絃の胡弓を伝承する藤植流の山田広代さんをお迎えし、**「鶴の巢籠」**を演奏して頂くことにしました。この**「鶴の巢籠」**には幾つかの曲の系統があり、胡弓から尺八へも伝承され、文楽の**「壇浦兜軍記の阿古屋の琴責め」**にもとり入れられ、そこからは坂井敏子さんにその胡弓の演奏をお願いしました。

さて、四絃の胡弓に先行する現在生田流で行われる三絃の胡弓は、古く上方の地歌や箏曲と共に盛んに行われてきました。今回は地歌の名曲**「ゆき」**を胡弓と三絃による形でとりあげてみました。**「新三段獅子」**は、男声と女声の打ち合せ風な歌の雰囲気を感じながら、楽器編成を張らまての大きな合奏曲です。

後半は、胡弓の新しい展開を求めた現代の作品で、最初は本月初演になる私の**「胡弓と箏による二重奏」**です。最後は、三つの胡弓(大・中・小)を中心に書かれた牧野由多可作曲の**「胡弓三章」**という、昭和四十九年芸術祭ラジオ部門優秀賞を受賞したユニークな作品です。集団創設以来初めての企画にご期待下さい。(畦地)

60

定期演奏会 日本民謡を探ねて

Regular concert: The Ongaku Shudan meets Japanese folk song.

七月七日(月) 午後七時開演 青山タワー・ホール

構成 白根きぬ子

○日本民謡組曲 福島雄次郎作曲

○恋の歌 長沢勝俊作曲

○田舞 — 古代舞曲によるバラフレイズより 三木稔作曲

○歌と演奏 — 日本民謡を集めて 福島雄次郎編曲

八木節・おてもやん・佐渡おけさ・宮城長持唄 ほか

●最後は会場の皆さんと歌いましょう。

客演・歌 米谷敏和男・小杉真貴子

ここ数年の民謡ブームには目を見張るものがあります。集団も、数度のレコーディング、そしてステージでも数多くの民謡を演奏して来ましたが、定期演奏会のテーマとして民謡が登場するのは今回がはじめてです。これを機会に、集団ならではの編成と演奏で、豊かな民謡の宝庫をたずねる企画を続けていきたいものです。

今回はゲストとして、米谷敏和男・小杉真貴子夫妻をお迎えしました。米谷氏は民謡尺八の奏者として有名な方で、この度はお得意の喉を聞かせて頂くことになっていきます。又、小杉氏の「佐渡おけさ」は絶品として定評あるところですが、プログラムの後半はこのお二人のレパートリーを中心に、唄と器楽の交錯で民謡メドレーを展開されます。アレンジは、民謡研究家としても知られる作曲家、福島雄次郎氏が引受けて下さいました。

田舞は民謡と直接関係はありませんが、民俗音楽的立場から作曲されていますので、今回、バラフレイズの中の原曲を元に、更に立体的な変奏を作曲者に書いてもらうことにしています。

七夕の今宵、客席とステージが一つになって、楽しく、そしてしみじみと、心のふるさと、うたのふるさとをたずねてみたいと思っております。ご期待下さい。(白根)

入場料 ●一八〇〇円 ●団体割引 一三〇〇円（十人以上の団体）

チケット取扱い：渋谷東急観光ブレイガイド・新宿チケットビュロー・銀座鳩屋堂
お問い合わせ・電話予約：〇三・四〇九・五三七四（日本音楽集団）

※団体割引は集団事務局でのみ扱います。

友の会会員募集

日本音楽集団では、演奏会などの催しのお知らせや（B会員）、定期コンサート、シリーズを一括して割引値で予約できるA会員を設けております。入会は随時です。ご希望の方は次の要領でお申し込み下さい。

A会員・定期コンサート・シリーズ半年の三公演、又は一年の六公演のチケット割引と座席確保、その他の催しのお知らせ、機関誌「邦楽現代」（年二回刊、定価三〇〇円）、広報誌「邦楽現代ニュース」（随時発行、定価五十円）の無料進呈。会費は三公演のチケット代を含み半年で五〇〇〇円、または六公演のチケット代含み一年で一〇〇〇〇円。

B会員・定期コンサート・シリーズ及びそれ以外の催しのお知らせ、機関誌「邦楽現代」、広報誌「邦楽現代ニュース」の無料進呈。会費は一年二〇〇〇円。

申し込み方法：(1)各演奏会場へ。

(2)現金書留住所、氏名、電話を明記し、会費を添えて日本音楽集団へ。

(3)銀行振込：東京銀行渋谷支店普通預金 〇〇〇-〇〇-543 日本音楽集団友の会宛。住所、氏名、電話、会費を銀行振込したことを明記して事務局へ郵送。

(4)郵便振替：振替番号、東京〇〇-3300 日本音楽集団宛。友の会入会希望と明記。

井上道義氏プロフィール——一九四六年東京生まれ。桐朋学園指揮科卒。卒業後、東京都交響楽団の副指揮者に就任。七一年に渡欧し、イタリアで第六回グイド・カントーリ記念指揮者コンクールに優勝。又、七三年には幻の名指揮者といわれるチエリビダツケ主催の指揮講習会に出席、第一等賞を受賞し、その才能を高く評価された。現在、ニューヨークランド交響楽団の主席客演指揮者で、今年二月には香港芸術祭に三週間参加。海外での活動が多いが、日本では新日フィル、N響を中心に共演を行っている。

左 55 秋の総合定期演奏会から



＜新越後獅子＞の演奏



＜竹に同じく＞の演奏後、拍手を受ける作曲家の池辺氏

日本音楽集団1979年度後期写真展

左 56 定期演奏会＜かぐら1979＞より



宮本幸子

昨年暮れ、集団の忘年会でのメイン・イベントのひとつは、宮本さんの演奏活動復帰宣言でした。集団発足以来の十七絃と箏の奏者であり、特に十七絃に関しては現代邦楽のアンサンブルの先駆者の奏者として貴重な存在でした。

三年前、お子さんができて休団したいという話がでたとき、大切な絃の下の方の力がなくなるといっての衝撃が大きかっただけに、この復帰宣言に皆大喜びし、同時にほっとしたものでした。

宮本——高齢出産でしたので、産後少し体を悪くして四十日ほど入院しました。退院後は子供の方が病弱になり、仕事に出ては気になってためなんですね。練習時間もなかなかとれないし、演奏活動が中途半端になるのではないかと心配し、考えてしまったのです。以前、家庭を持っている人がやはり子供のことや家のことで時間になると練習の途中でも、合奏の油が乗ってきていてももう少しやりたいなと思っている時に、もう帰らなければならぬと言ったと帰ってしまふ……。それが、自分もそういう状態になってきて、一しょにやっている人たちが

に迷惑をかけるといけないと思ったのが休団した一番の理由でしたね。皆さんはちょっと利己的で悪いかなと思いますけど。

それできっぱり休んだ方がいいと思って、休団中は集団からの連絡も一切お断りし、たまにチラシなんかが目につくことがあっても、見ないようにしたりして（笑）。その間、子供育てるので忙しくしていたし、けっこう楽しい生活をしていましたよ。子供もまだ二歳九か月で手がかりですが……。

休団中正派音楽院へは教えに行っていました。自宅でもおけいこはしていましたけど、指導者としても自分の勉強をしなければいけないと思いましたね。子供も元気になる私の母が一しょに住んでくれるようになりましたので、そろそろ演奏活動に復帰できそうに思ひ、いろんな演奏会を聴いて歩きました。聴きまくった……という感じです。

そう言えば、昨年は演奏会でチラチラと宮本さんのお顔を見て、そろそろ（復帰）かな、などと思っていました。それにしても女性は結婚、子供と次々と試練

を背負いながら活動を続けてゆくことになりました。妻となり母親となってゆく人を集団の中で何人も見てきました。もちろん結婚するとやめてしまう人もいますが、今ふり返ってみると大半の人がやめずにがんばり続けていることは頼もしい限りです。先輩のそういう姿を後輩が見習うのでしょ。おんぶしてでも出てくる人、保育園に預けて来る人、母上に見てもらっている人。種々いますが……。

宮本——うちは母がすすんでいるというんです。私が家でお稽古だけやっているのでは孫の世話をしていても張り合えないからと、はっぱをかけられるんです。リサイクルの時でも惜しまず応援し

てくれます。それに比べ、私は集団結成の時も写真入りで結成メンバーとしてチラシに載せるからと言われた時も、最後まで決心がつかなくてせかされました。私自身、与えられたことはとても一生懸命やる方ですが、すすんでそういうことをやる方ではないんです。その時も中島靖子先生に是非やりなさいって、母と同様に励まされました。

そういう面が演奏にも出るんじゃないかしら、私の大の欠点だと思っているんですが。

欠点の話が出たところで……。宮本さんの長所は相手や仲間への思いやりが深いことでしょう。例えば、尺八との八萌





春Vの演奏では、調和したみごとなデュエットを聴かせます。そういう点、十七絃の奏者にはピッタリですね。

宮本——アンサンブルが好きなんです。十七絃は高音部のメロディの支えでしよ。すごく楽しい。低音部というのはとても合奏には大切な部分ですから、メロディが生きるも死ぬも……。しかし、合奏する、相手に合わせる、という技術もむずかしいんですよ。相手に合せながら自分の個性も出せる演奏家になれると最高ですね。独奏の場合は、又、全然違いますけど。

十七絃を弾き始めたのは、十七、八の

頃、江藤幸明さんの作品で八重の花Vという曲で初めて十七絃を弾きました。それまで五音階の曲しか弾いていなかったんで、和声的短音階のソのシャープの音なんか出て来るととても耳新しく感じました。それがきっかけです。

話しが前後しますが、母上が当時忙しいうちをお筆を習っていらして、それを聞いていて宮本さんもお筆を習い始めたそうです。

宮本——十歳の時でしたでしょうか。お筆を弾くのが好きで好きで。昔は暗譜のおけいこでしたから、一日置きに行くんですよ。それが楽しいものだから勘違いして続けておけいこに行つて、先生に笑われたことがあります。それが続いて現在に至っている、とでもいいでしょうか。初めしづつだった集団も、入ってからは段々おもしろく楽しくやってきました。最近では十七絃の独奏曲もできてきましたし、宮城先生の考案された楽器を、低音部の伴奏楽器だけにすまさないという他の方たちの意欲的な動きもあり、それに便乗したわけですけれど。(笑)

大変謙虚なお言葉。しかしながら既に十七絃のリサイタルを二回開いていらっしゃる宮本さん。後進の指導と合せて演奏活動に今後を大いに期待しましょう。

(レポーター 霜島素子)

邦楽三昧

邦楽堂ローン・特典ご案内

便利な邦楽堂ローンをご利用ください(24回まで承ります)

●お支払い例(花柳三味線)
現金返済例: 800円(一括払い) 割賦返済例: 80,000円
(頭金3,300円・月々3,300円×10回・10ヶ月)

●貸・返済額、全品1年無利息保証。
●商品価格のアフターサービスについては当行が責任を負っています。

●特別注文承ります。納期5日。
営業時間: 10:00AM-7:00PM 毎週日曜日定休



アフターサービスの店

株式会社 邦楽堂

●東京本店(都立大・新・池袋店) 03-421-8811
●東京支店(有明・有明駅前店) 03-421-8811
●東京支店(有明・有明駅前店) 03-421-8811
●東京支店(有明・有明駅前店) 03-421-8811
●東京支店(有明・有明駅前店) 03-421-8811

●大阪支店(都立大・新・池袋店) 03-421-8811
●大阪支店(有明・有明駅前店) 03-421-8811
●大阪支店(有明・有明駅前店) 03-421-8811
●大阪支店(有明・有明駅前店) 03-421-8811
●大阪支店(有明・有明駅前店) 03-421-8811

半田淳子

次代の琵琶界を担う売れっ子琵琶奏者、半田淳子（綾子改め）。日本音楽集団のメンバーになったのは一九七二年。鶴田錦史氏の高弟であるが、一昨年門下として十年経ったので、「もう卒業ということにして、これからは自分の好きなようにやってみなさい」と手放されたそうである。進境著しい現在、ただひたすら琵琶を弾いていた……、という以前に比べ活気があふれている。琵琶を始めた経緯から、鶴田先生の指導についてなどを伺ってみました。

半田——私の母が五十年近くも前になるかしら、鶴田先生に一年ほど習っていたことがあったんです。それで十年ぐらい前、何かのきっかけで母がまた先生の所へ伺うことになり、私がそのおけいこにくっついて行っただけです。その時、あの高い駒の上を、次々とすべるように移動する先生の美しい手、それからその音がすばらしかったんで感動したの。それで母のいない時見様見真似でやっていたら、「この子弾くんですよ」「じゃあやってみなさい」ということで……。そして、あなた本格的にやってみなさいと言われる

て、結局母のお株とっちゃったんです。

鶴田先生からはいつも、一つの音をきれいにしていかに弾くことを教わってききました。一つの音を大切に、余韻の処理をきちんとしてから次に移るように。これは古典を弾くときも現代曲のときにも共通する基礎的なことですね。今、十年経って卒業ということなんですけれど、教わったことに留まらず、自分のものを開発して個性を持って進んでゆくように言われました。

独り立ちした今、考えていることは何でしょう。

半田——琵琶は今まで古典（弾き語り）しかなくて、一般的にはとてもとつきにくいものだったと思うんですよ。集団のメンバーとしては海外公演で百回ものステージに乗ることができ、仕事も次から次へとあつてすごく恵まれた中で私は専門家になれたと思うんです。でも、今一般的に言っている琵琶の専門家になろうとしても、続けてやってゆくのは大変ですよ。練習曲もないし、楽器も手に入りにくい。演奏会を聴いて、琵琶ってすご

くすてきだからやってみたいという人がけっこういるんです。だけど、そういう人をどうやって楽しく導いてあげたらいいのかということになると悩んでしまう。ですから、こうして十年勉強してきて考えることは、誰にでも弾ける、親しみ易い曲を作りたいということですね。

しかし一方では、古典は大変素晴らしいもので琵琶のすべてだという風にも思えます。非常に奥が深いから、私などはまだまだもっと勉強し研究していかなければならないんです。今の私の仕事としては、琵琶に入りやすいようにレールを置いてあげることができた、後は何か自分の好きな演奏をしてゆきたいと思

ますね。

琵琶界の将来を思い、琵琶一筋。私の恋人は琵琶よ、他のことは何も興味ありません……。という風に見えます。男性には関心ないのかしら、と回りでやきもきしているんですけど。

半田——やっぱりいい人がいれば一回ぐらい結婚してみたいと思いますけど（笑）。結婚するんだったら男の人も妻としての務めを果たしてくれるような人でなければいけません。私も琵琶をこうやって続けて行くんだしたら奥さんになる資格はないと思うんですよ。来年は又、二回



音楽の世界

- 音楽家・舞踊家と愛好家が自由に発言できるひろばとして、ユニークな成長をとげつつあります。
- 日本の音楽の発展の芽ばえを、ともに考え、ともに育ててゆく、自由で進歩的な音楽ジャーナリズムの確立が私たちの願いです。
- あなたにとってひとつでも心にとめる記事がありましたら私たちのようこびです。

●本誌は次のところでお求めになれます
 日本楽器（銀座店・渋谷店・名古屋店・大阪心斎橋店）、丸善日本橋店・芳音舎
 読書館センター、美和書店、友好堂、他

お問い合わせは電話(03)200-4924

日本音楽舞踊会 編

〒160 東京都新宿区百人町1-7-3
 第2富士電工ビル110号
 1部450円千50円 6ヶ月千2500円 年間千5000円
 振替 東京1-65140



ぐらいヨーロッパへ出かけなくてはならないし、だから割れ鍋にとじ蓋じゃないけれど、ちやうどうまく合ったような人が今に現われたらね。人生なんて計画的にうまくいくものでもないから、この一瞬一瞬を大切にしておきたい。時間を過して行けばいいと思います。私、今のところ充実しているし、死ぬまでそういう人

生でいたいです。

集団と共に行った一次から六次までの海外公演の全ステージ百回を踏み、今年の二月半ばから一カ月半、フランスで三十五回ほどの演奏会に出演したとのこと。これだけの数の海外経験と、日本国内では古典、現代邦楽の演奏はもちろんのこと、芝居やアニメーション、ラジオ、テレビ・ドラマのバック・ミュージック、コマーシャル、ニューミュージックなどの演奏、琵琶の演技指導、創作舞踊の音楽の作曲や演奏など、あらゆる方面に引っ張りだこの半田さん。この幅広い経験をもとに、今後の活躍を期待したいと思います。(レポーター 雷島素子)

趣味の宝飾

わこう

貴女をより美しく!!

より良い品を格安に!!

貴州商事K.K.

鶴瀬店 0492(51)4443・(51)2709

鶴ヶ島店 0492(85)4400

*ご一報下さればお伺いいたします

邦楽現代クイズ——正解は半田淳子

「第六次海外公演のハワイ公演第四日目、集団の海外コンサート百回目を迎えました。団員の中でこの百回全てに参加した人が一人います。それがだれでしょう」というクイズが前号載りました。△新しい邦楽を担う人たち——半田淳子▽の記事中でおわかりのように、琵琶の半田淳子が正解でした。残念ながら正解はありませんでした。

B5判／一五六頁／定価九八〇円

季刊邦楽

年間購読ご希望の方は、季刊邦楽何号より、と明記のうえ、四五〇〇円（送料共）を、邦楽社までお送りください。年間四冊の「季刊邦楽」と、購読者サービスとして、毎月の「邦楽ファン」もお届けいたします。満五歳を迎えた「季刊邦楽」のご愛読をお願い申し上げます。

季刊邦楽

特集 すかがき 21号

懸賞論文発表

邦楽コンクールの報告

争組歌と源氏物語



- 7号 二番叟の心とがたち／尺八のすすめ／琵琶楽
- 11号 民謡を考へる／初めて三味線を弾く人のために
- 12号 邦楽界／越天楽をめぐって／アメリカ人と能楽
- 13号 中学校の音楽教育の改訂と邦楽／君が代の歴史
- 14号 勅通帳／新しい邦楽七団体／華曲学校の訪問記
- 15号 上六段／邦楽家の死の謎・三題／尺八の実用理論
- 16号 現代邦楽のレコードと楽譜／関西の邦楽だより
- 17号 道成寺もの／名曲のルーツ／NHK邦楽放送
- 18号 弁慶もの／手作りの尺八／53年度邦楽界総決算
- 19号 山姥もの／復原されたまぼろしの楽譜／八十絃

21号

すががき

名曲のルーツⅤ

吉川英史／月溪恒子／三谷陽子／押田良久

懸賞論文発表

「邦楽を発展させるにはどうしたらよいか」

邦楽コンクールの報告

田辺秀雄／吉川英史
金田一春彦・長尾一雄・片山彦三

箏組歌と源氏物語

石田百合子

松浦検校と八重崎検校

畑伝兵衛

20号

みだれ

名曲のルーツⅣ

大貫紀子／三谷陽子／蒲生美津子

邦楽雑誌の歴史

田辺秀雄／竹内道敏

「季刊邦楽」総目録

平野健次／久保田敏子

心中もの／お染・久松雑考

西沢爽

芸大邦楽科設置秘話

服部栄次／野辺地東洋／平井澄子

この人なり 宮城道雄伝

吉川英史著

上製函入／A5判／定価8000円

宮城道雄作品解説全書

吉川英史・上参郷祐康著

上製函入／B6判／定価4000円

3月22日発行・22号

小町もの／名曲のルーツⅥ

邦楽家と飲食物／華曲の新しい教育法

日独日本音楽研究シンポジウム

まぼろしの俗曲奏者に会う／中国の胡琴

民謡ブームの背景／藤本瑞文師の稽古場めぐり

〒105 東京都港区虎ノ門1丁目19番14号 邦楽ビル2F 株式会社 邦楽社 Tel 03 (591) 7271代

日本音楽集団第七次海外公演

東南アジアに日本民族の芸能のルーツを求めて

三橋貴風

□厳冬の日本から熱帯の国タイへ

今年には正月どころではなかった。一月の四日には仕上げの総練習、そして翌五日には小雪のちらつく練習場で楽器の梱包を行った。

六日の朝は何と八時に成田集合という我々にとって少々苛酷ともいえる計画だったが、団長長沢勝俊、音楽監督三木松ほか総勢十五名、十時十分発JAL七七一便で真冬の日本を出発、香港経由十四時二十分(時差二時間)バンコク空港に着陸した。

至る所で工事中の道路を走り、宿舎のアマリン・ホテルに到着。ここで現地の国際交流基金バンコク駐在員事務所の浜西氏、坂戸氏らの出迎えを受ける。

七日は一日中ホテルの宴会場を借り切って練習。実は今回の海外公演は標準編成にも拘らず、全曲暗譜で指揮無しという初めてのケースでもあるので、三十歳前後の年代層の多かった派遣メンバーは大変な張り切りようだ。

八日は公演の初日。移動の疲れも回復した我々は、朝六時にホテルを出てバンコク名物の水上マーケットへ繰出した。そのあと王宮を巡って、昼過ぎには今日

の会場でありタイを代表する法律系の大学であるタマサート大学に到着した。

今回は全行程で八回の公演と四回のワークショップで、内二回はこのバンコクで行われる。プログラムは別表の通りだが、そのうち八獅子は今回ご無理をお願いし参加して頂いた三味線の今藤小苗さん、笛の西川浩平氏(団友)、そして高橋の打楽器による新しい形の演奏である。

△アジアのメロディー△は第一回東南アジア公演で使った現地の曲に新たに二曲を追加し、訪問する国と日本の民謡を合わせたものにした。△スガム・サエン・ドゥアン△(タイ)、△エス・シリシ△(インドネシア)、△レロン・レロシ△(シンタウ△フィリピン)、そして△江戸子守唄△(おてもやん△の五曲であったが、このステージには通訳で参加の団員のデイヴィッド・ヒューズ氏(ドイツ)が三味線の演奏者として加わった。

学生達による民族楽器(タケーという琴や胡弓、そしてクルイと呼ばれる箏笛等)の演奏を見学してから、いよいよ七時三十分、聴衆も全員起立して国王讃歌を聴いた後、本番は始められた。高橋の鼓を先導とする集団流オーブニングに従って演奏者が入場。会場は階段教室でキ

ャパシテイ五百程度だが通路やうしろのスペースも立錐の余地なく埋め尽くす超満員にも拘らず、聴衆は各楽器に敏感に反応し、一楽章ごとに驚く程盛大な拍手を送ってきた。最後の曲が終わる学長が挨拶で述べた言葉には我々も感動した。「今日のあなたの達の音楽は、天国からの声に聞こえました。必ずすぐまた来て下さい。今度は四千人のホールを一杯にして待っていますから。」

先ずは初日は無事に終わった。と書きたいのだが、この夜、一大事に発展しかねない事が起こった。というよりは私一人で起こした事だが、テンマツをお聞き頂きたい。自室で夜中一時頃まで同室の黒坂氏と話をし、ベッドに入ろうと思った瞬間「アッノ」と叫んで後は絶句。命より大切な尺八一揃いが無いのだ。てっきりロビーに置き忘れたに違いないと思いきや、夜勤のホテルマンを総動員して暗い一階をくまなく探してもやはり無い。朝まで待とう、と動転する気持ちを押さえて部屋の前まで行ったが廊下であれこれ考え、ベッドに入ったのが三時頃。熟睡出来ぬまま六時には起き出しフロントへ行ってみるが居いていない。無駄と知りつつ、残骸でも落ちていればと、ホテルの周りを歩いてみ

る。昨晚寄った売店でも預っていないという。もはや万事窮す。そろそろ団員も起き出す頃なので、意を決して三木さんに「大変な事をやっちゃいました」と電話をしてから部屋へ何う(この時電話では詳しく話さなかったため、私が部屋へ行くまでの数分間に、三木さんはざっと三十通りほど状況を読みめぐらされたという)。一瞬間を曇らせた三木さんは、人身事故でなくて良かったと、続き

部屋にいた事務局の奈良とディズをノックして対応策を考える。先ず警察に盗難届けを出し、保険の手続きをする。日本から別の楽器を次の公演地ジャカルタへ送ることを旅行代理店に頼むよう、自宅に電話を入れ……等々。自分の演奏者としての責任をひたすら陳謝したが、同情した三木さんは手持ちのドルを貸してくれ(現金も一箱だった)。「さあ、落胆もしていられないから、それぞれの部屋に戻って行動を始めよう」と言ったその時、ふと吉村が部屋に入ってきた。きょとんとしている彼女に事情を説明すると「あるわよ、バカね。坂井先生がちやんと預かってますよ」、一同「……!!!」△×××△という訳で、皆が「良かった、良かった」と笑い出す迄に二、三分はかかった。

筆者は生まれて初めて、腰が抜ける」と

いうのを経験した。奈良氏曰く「流離ア
ジヤに気を付けよう!!」聞くところに
よると置き忘れたのはロビーでなく売店
で、しかも直後にそれを発見したのが、
な、なんと同室の黒坂君であったという。
嗚呼、それはあんまりだ。あまりにも
のショックでそのあと食堂でも手の震え
が止まらない筆者を見て、坂井先生は責
任(?)を感じられたのか、救心丸を下さ
った。有難うございました。

集団内の大先輩である坂井先生は意外
なチャーム気ともいえるキャラクターを
お持ちである。この後も旅行中何度か物
を忘れた団員がいたが、そのつど大体預
かっていたのは坂井先生であった。宿舍
のホテルに飾り棚があり、そこに信楽に
似た焼物が置いてあった。これは一体何
焼きとこのだろうかという事になった時、
坂井先生が「これはタイ焼きなのよ」と
いわれたのは有名な話である。

かくて九日は始まった。今日は三時か
らゲネプロを開始。夕刻AUAホールの
ステージで練習している団員に、無数の
蚊が襲いかかるのが客席の後からも見え
る程だったが、息を吸えない程の殺虫ス
プレーの煙幕で何とか撃退した。

会場のキャパシティは約五百。招待客
を含めた聴衆は二階席までギッシリだっ
た。昨日とは打って変わって静かな客で
はあったが、曲が進むに従って場内は湧

いて来た。

日本人の故郷?! インドネシア

十日、バンコクを出発、赤道を越えた
インドネシアは雨期で、空から見たジャ
ワ島は河川が氾濫し、水田は赤茶色の沼
と化していた。空港で前回もお世話にな
った交流基金の楠治氏と再会。強い雨の
中を市内へ向うバスが信号で停車する度、
濡れ鼠の子供の新聞売りが車窓を叩く。
道中には我々の公演の垂れ幕が数ヶ所掛
かっていた。宿舍のメンテンホテルに着
き、夜は日本文化センターでのレセプシ
ョンに出席。所長の中川氏及び在留邦人、
現地の芸術家達の顔も見える。そこで私
と福田の尺八で八音の遠音を披露、飛
び入りで、ティグが得意の民謡八南部
牛追唄を唄い喝采を浴びた。

十一日、十二日とジャカルタでは二回
公演が行われるが、何れも会場はT.M
ヘイスマイル・マルズキという作曲家を記
念して作られた公園内の文化センターの
テルチニタ・クラブ劇場だった。十一日の

午前中同じ場所にて記者会見があり、出席
は長沢、三木、坂井、三橋、奈良、ディ
グの六名。質問の内容の多くは「日本の
政府は伝統芸術に対してどの様に援助を
しているか?」「若人に古典は人気があ
るか?」「外人で(例えばディグの様に)
邦楽器を演奏する人口は?」「伝統の近
代化とは?」等々に集中した。午後はワ

ークション・クラブの後、八時から公演。公演
後ある聴衆から聞いた話だが、冷房なし
で演奏する我々の頭から湯気が昇るのが
見えたそうである。次の機会には真夏用
の衣装を真剣に考えた方が良さそうだ。

十二日、昨日同様午後は雨。夜のコ
ンサートは昨晩の演奏がロコミで伝わっ
たのか、客の入りが増え、実に真剣に耳
を傾けてくれて終演時のホールの雰囲気
はまことに良かった。しかしその後楽屋
へ来たある記者の質問には唖然とさせら
れた。「暗譜で演奏しているメンバーは、
譜面を見ている演奏者を即興で伴奏して
いるのか?」というのである(今回特別
に参加してもらったメンバーは曲によっ
ては譜面を見ていた)。現地の古典音楽
は総て暗譜で演奏するのが常識なので、
この様な質問が出たのだと思うが、これ
には皆「せつかく暗譜したのに」と苦笑
せざるを得なかった。

十三日、九時にバスに乗り込み、素晴
らしいハイウェイを通りブンチャク峠を
越えて、バンドンへ向う。戦時中兵隊と
してインドネシア(スマトラ)に滞在し
ていた長沢団長は、流石に知識が豊富で
話に熱が籠もる。途中、有名なボゴ
ル熱帯植物園に立ち寄ると、広大な敷地
には例の大オニバスや、持ち帰りたくな
る様な紫檀の大木、それに直径五十セン
チ程もある竹などが所狭しと植わってい

る。

道端には露店が立ち並び、一風変わっ
た臭いだが食べたらずみつきになるとい
うドリアンや、果物の女王マンゴステイ
ン等をその場で買って食べて見る。一角
に巨大なサイインゲンの様な物があり、
誰かが随いでいると、売り子が包んで渡
してくれた。サイインギンとは私は欲し
いという意味だそうである!!

バンドンには午後三時到着。今日の宿
舎は、例のアジア・アフリカ会議の議場
の斜向にあるホテル・ホームマンで、こ
の国のオランダ統治領時代の名残りを残
す大きな建物である。ここは高原の避暑
地というだけあって、窓から見える山が大
変美しいが、夜は熱帯の国とは思えぬ位
肌寒い。

十四日、今回の市営のホールへ向い、
四時からワークション・クラブ。学生たちの「ゲ
チャビ・アンサンブル」(ケチャビとは
金風絃を持つ小型の琴)の演奏と交歓で
あった。ゲネプロをしていてもホールの
外から夕べのお祈りのコーランの音が聞
こえて来るのは、海外公演ならではの情
緒であろう。ワークション・クラブのあと、現
地の別グループがワークション・クラブでのイ
ン氏の学生たちの演奏にクレームをつ
けて来るという一幕があった。やはり派
閥間の意識というものは万国共通なのだ
ろうか。

本番は八時からで、立見も出る程超満
員の客からは一曲ごとに掛け声や口笛が

飛び、地元の曲ヘエス・リリンVの演奏をした時は演奏の最中でも曲に合わせて手拍子や拍手が断えず起きるなど聴衆の乗りは頂点に達していた。すごい演奏会だった。

十五日はジョクジャカルタへの移動日。一行は空路だが、三木、柿沼両氏は飛行機に乗らない楽器の汽車輸送に回り、途中事故にあい、なんと二十四時間の熱帯平地移動を経験したようだ。

十六日、午前中に地元の音楽や舞踊の専門学校を訪れて見学をする。先ずASTIとSMKIの二校を訪問したが、やはり我々の興味の中心はガムラン音楽だ。面白く感じたのはこの国では「音楽」が二通りあり、「カラヴィタン」「ムンシーク」と分けて呼んでいる事である。前者は繊細な伝統音楽（主に五音階）で後者が所謂西洋音楽の事である。伝統芸能は人々の生活の一部になっており、この国では普通の学校でも伝統音楽が必修科目に入っているそうである。

ここでは各地方の踊りとワヤン・クリットの実演を見る事が出来た。革を使い美しく彩色された人形を遣うダーラン（影絵師）は、足で打楽器を打ち、台詞を喋って、手で演技をするという重労働なのだが、祭りの時などは夕方から始めて翌朝まで続ける事も珍しくないらしい。実験的な動きとして、かつて（一九六

〇年代）西洋音階に合せた楽器群のガムラン・スブラというのが、スマランという地方でおこったが、すぐに廃れてしまったという。

三番目に訪れた学校は国立で唯一のムンシークの専門学校である。この国に西洋音楽が流入して来たのはわが国よりもずっと古く、オランダ統治が始まった時（三百五十年位前）に遡るが、現在の全体的なレベルは余り高いとはいえない様だ。音楽監督の三木は「あれだけ鍵盤打楽器の多いガムランの伝統があるのにマリンバ奏者が出来来ないのは実に残念だ」と彼らにマリンバをすすめていた。

十七日、四時からのワクシ・クラブを経て本番、会場には昨日訪れた学校の学生や先生方が見えていた。今夜はラジオの中継録音もあるということで、全員張り切っている。ホールが半野外の為、本番中にコウモリが目の前を飛び交い、マナウナサーが曲順を間違えたりしたのが少々気になったが、ジャワ島最後のコンサートはアンコールのヘジャゴカテV（ヘジャワ中部の民謡）の演奏で落ち着いた雰囲気の内を終了した。

□最後の楽園バリ島へ

十八日、七時ホテルを出発。バリ島へ。空港ロビーへ入ると早速踊り子が全員に花の歓迎してくれた。この島はジャワ島が回教なのに対し、ヒンズー教を守っ

ているので風俗や習慣が、がらりと違う。前回も我々に随行してくれたブトゥさんの無料奉仕のガイドでホテルへ向う。サヌール・ビーチというバリで最も静かな浜に面したバリ・ビーチ・コテージ

に荷物を降ろす。すぐに着替えて泳ぎに出る。夕方、珊瑚の内海や空が赤紫色に染まり、そこにヤシの葉がシルエツトで浮かび上がる光景に酔う。バリの文部省支局のパンジー氏の案内

バンコクのタマサート大学でのリハーサル



ジョクジャカルタの会場の前で



バンコクの
水上マーケット探検隊

芸術家達には心から拍手を送りたい。

で、その夜は近郷の村の祭りに見に行く。真暗な田んぼの路を暫く走って村に着くと、ランプの灯も燦々と屋台が軒を並べ、一角では博奕に興ずる人々もいる。何にしろ村人達にとっては今日が一年中で最も楽しい日なのだ。寺院の前庭でチャロナランという舞踊を見る事が出来た。ともかく、実際に音楽も舞踊も演じている人々は総て友人ではなく、昼間はごく普通の農耕や漁業に従事している村人なのだから素晴らしい。

十九日、六時にモーニングコールで起こされ、全員でパリの州知事の許へ表敬訪問をする。持ち運びが簡単な尺八でまた八重の遠音Vを演奏。博物館へ寄った後、コカール（音楽舞踊学校）を訪れた。ここでも舞踊、ガムラン、そしてワヤン・タリットを見学する。昨日空港へ出迎えるにきていた踊り子達はこの学生だった。パリのものはジャワに比べて、テンポもダイナミックも軽快で変化がある様に思える。それはダーランの動作、両手の使い方のきめの細かさにも現われている様な気がした。

夜、アートセンターでコカールの学生達の演じる新創作を鑑賞。長管のスーリンも登場し、バリ婦りの新進舞踊家の振り付けによる演技はかなりモダンな印象を受けた。非常に保守的なジョクジャカルタに対し、古典も大切にしながらどんどん新しい試みをしているバリ島の若い

二十日、公演は今日を含めてあと二回を残すだけとなった。今夜のホール（アート・センター）は半野外どころか木の柱に屋根が乗っているだけ（東屋を大きくした感じ）で、雨がホールの中央まで吹き込んでくるので、特に三味線の演奏者は戦々兢兢である。ワイクシ・ワップは今日が最終回であった。またここは虫に悩まされる会場でもあった。先ずは白蟻だが、レンガ敷きのステージのすき間の

到る所にある巣から這い出てくる。楽器や立奏台に付いて日本へ連れ帰っては大変と、穴を紙で塞いでガムテープを貼ったり大騒ぎ。又、次にはウスバカゲロウ（白蟻の元凶）の大群がホールの裸電球にどこからともなく集まって来て、その数たるや万を超える程になって来たので、これはたまらんと一時会場の明りを消した。幸い暗闇なので練習に支障は無かったのだが、楽屋側に一つだけ残しておいた電球にその大群が全部集ってしまった。ガードマンが下に水を入れた大きなナベに悠長に手で羽を叩き落としていた。水面の上に山盛りになってまだ動いている羽にに向かって、筆者は強力なスプレーを親切にもタプブリとかけておいた。が、柿沼氏の話しによると、パリの人はそれを食用にする為に集めていたらしいのである。

本番は州知事の到着を待ち、蛙と虫の

音の中で始められた。キャバシナイ三百人位の席よりロープ一本で隔てた外野席（勿論無料）の方が数が多く、拍手や声援も外野の方が賑やかであった。最後の曲ハダンス・コンセルタンツI四季Vのエピソードはアンコロンを全員（スタッフも含めて）が持って出て来るという演出を試み、それは受けた。アンコールには島のわらべ歌ハメヨシメヨシV（猫の唄）をダンデル（ガムランの楽器）と一緒に即興的に演奏し、聴衆も大いに湧いた。

ステージに降り皆でプールに入り本番の汗を流す。今夜はトッケイというトカゲの声を七回続けて聞いたから、何か良い事があるかな？

二十一日、今日はバリ島最後の日。団員はそれぞれ、タクシード近郊の村廻りをする者、南太平洋の太陽を存分に吸収する者、日本人には言いにくいキムタマ・山田のフアーへ行く者に分かれて行動した。筆者は迷わず二番目を選んだ。この島も他の南方の島々と同様、戦時中の日本軍の足跡が残っていて、海岸からそう遠くない所に、半ば沈んだ旧日本海軍の船が無気味な姿をさらしているのだが、皮肉にもそのあたりが一番珊瑚が美しい。夜は全員でケチャック・ダンスを見学。以前よりも観客が増え、こちらの目も肥えたせいか、少し感激が薄い。しかしそれはひょっとすると演じる側にも問題

があるのかも知れない。というのは、本来この芸能は村を疫病や飢饉から守る為の魔除けの祈りの意味を持って演じられていたのだが、バリ島といえども現代の生活の中ではもはや必然性を持ったものではあり得ないのかも知れないからだ。帰ってからプールに集合して記念撮影してから、浜辺のレストランで長かったインドネシアの打ち上げを行う。

□マニラCCP

二十二日、七時出発。十時三十分の機でバリ島に別れを告げる。ジャカルタ経由だがここで二週間近くの間、常に行動を共にして下さり大変にお世話になった柿沼氏、そして所長の中川氏に厚く礼を述べて別れ、我々は一路フィリピンへ向かい二十二時マニラに到着した。

二十二日、今日は此の演奏旅行の最終公演、つまり楽である。マニラ湾の海辺にある会場CCP（フィリピン文化センター）はモダンな建築のコンサートホールである。本番は大ホールで、前回は日本人のコンサートが数十名という入りだったので心配したが、そのひと桁上の聴衆の積極的な熱気の中で始められた。外部から特別に参加したメンバーも、この頃はどのレパートリーにも慣れ切った演奏をしていた。最後のハダンス・コンセルタンツIⅤはご当地の竹のササラを使って零距離を盛り上げ、楽の公演は旅

行の最後を飾るに相応しい演奏で終わった。

二十四日、早朝五時半には荷物を出して空港へ。しかし荷物のトラクタが非常

バリ島の半屋外のホールでリハーサル



に遅れてチェックイン締め切りの三分前に到着。おまけに、日頃楽器をフリーパスさせる為の賄賂を払ってくれないとCIPを面白く思っていない空港の税関吏が、当て付け宜しく楽器とトラクタを一

つ一つ全部開けて中味を出させ、「No. Encry」と調べてくれた。お蔭でフライト時間ギリギリにやっと全員乗り込むという、最後までハラハラする旅であった。

今回初めてバンコク市内へ入った時、迂闊にも以前のジャカルタと比べて「こちらの方が進んでいるな」と思ったが、その直後ジャカルタを訪れた時、それが

大変な間違いである事が分かった。東南アジア諸国は年々大した勢いで進歩しているのだ。この六年間で、街の臭いも人の目付きも随分変わって来た様に思えるが、少なくとも物価がかなり上昇し、日本人が増えた事だけは確かな様だ。

この旅行は私達の側が一方的に演奏するだけでなく、我々日本民族の芸能のルーツを探るべく吸収する物も多かったと思う。

□公演日・場所

一月八日(火)、九日(水) バンコク(タイ)

十一日(金)、十二日(土) ジャカルタ

十四日(月)、十五日(火) インドネシア

十七日(木) ジョジャカルタ

二十日(日) バリ(インドネシア)

二十三日(水) マニラ(フィリピン)

□参加者

団代表——長沢勝俊

音楽監督——本公演プロデューサー——三木睦

笛——西川浩平 尺八——三橋貴風 福田輝久

三味線——今藤小苗 琵琶——田原順子

箏——太田三味線——坂井敏子

二十絃箏——吉村七重

箏と十七絃——木村玲子 滝田美智子

打楽器——高橋明邦・黒坂昇

三味線及び通訳——デイヴィッド・ヒューズ

事務局——奈良義寛

□演奏曲目と演奏者

プログラムA

一、ファンタスマゴリア／長沢作曲

二、獅子

三、三味線・今藤 笛・西川 輪太鼓 高橋

四、前奏／長沢作曲

尺八・三橋又は福田 箏・吉村

五、ダンス・コンセルタントI／四季

／三木作曲

プログラムB

一、ダンス・コンセルタントI／四季

二、風鈴／長沢作曲

笛・西川 打楽器・高橋明邦・黒坂昇

三、アジアのメロディ

四、ひな祭り／三木作曲

尺八・三橋又は福田 二十絃箏・吉村

五、ファンタスマゴリア／長沢作曲

ワークショップのプログラム

一、獅子 二、座の遠音 三、舟弁慶

四、聯合三重 五、蝶が死ぬ湖

六、六段の調 七、東から／三木作曲

八、踊る春 九、ニボホ

バリ島の打ち上げで、？氏と筆者



バリ島の半屋外のホールで、ガムランの楽器とアンコール共演の打ち合せをしているところ

二十絃箏



日本音楽集団推薦

琴光堂和楽器店

■ 東京都世田ヶ谷区赤堤2丁目25-7 TEL 03(328)2802

心に残ったものから

木村重雄

この時期にふくまれるものとして、次の四件が挙げられる。

1. 野坂恵子第二回ロンドン・リサイタル（9月30日 セント・ジョン・スミス・スクエア）
2. オペラ「あだ」(三木稔作曲)初演（10月5・6・10・12日 オールド・ヴィック劇場 ロンドン）
3. 野坂恵子第8回華リサイタル（11月28日 ABC会館）
4. かぐら一九七九—日本音楽集団定期57（12月7日 青山タワーホール）

「心に特に残ったもの」という編集部に案に限定しても、それぞれが意義のある催しだったが、本誌の前号本稿で野坂恵子を主として論じたため、無論1と3とはいずれもそれとは違った意義をもつ内容ではあったが、ほかにも存在するのと同じテーマで二回時評を続けるのは必ずしも望ましいこととは考えられぬのでここでは省略し、2と4についてふれてみることにしたい。

オペラのばあい、作曲から公演までのすべてのプロセスにおいて、いかに一部

門がすぐれていてもトータルな仕上りをその条件によって決定づけることは不可能で協同作業というかたちにかかってくる。そして「あだ」のばあい、まずなによりも制作・演出（舞台制作）の責任者であるコリン・グレアムと作曲者である三木とが、各自の領域においてベスト、というより相関関係によりそれ以上の力を傾けすべてをつくしたところに、成功の決定的な原因があった。無論、台本作者ジェイムズ・カーカップ、指揮者スチュアート・ベドフォード、マリー・スロラック（浪路・ソプラノ）、ケネス・ボーウエン（雪之丞・テノール）をはじめとする「イングリッシュ・ミュージック・シアター」の出演者とスタッフのすべてが最善をつくしたこともみのがせない要因ではあるが、やはりグレアムと三木による全体の方向づけとディテイルに対する細心の配慮が彼らをして有機的にかかわりあわせ、統一ある仕上りを生んだものといえる。日本語版上演よりも先に、彼らの公演が望まれる理由である。

「日本音楽集団」が歳末の年中行事化し

ようと試みている（と推察される）「あだ」の79年版は、芸術性とエンターテインメント的要素が適度に融合され、時事的な諷刺なども織りこんで、まさに邦楽のもつ庶民的な親しみと健康なユーモアと、音楽による楽しみとをそなえた独自の劇的作品としてまとめられていた。KD事件を扱った11月の「勸進帖」の「山伏問答」などという秀逸（でもあ

今回は、このところ増えている邦楽器演奏家による作曲活動について考えてみたい。

思えば、ついさきごろまで邦楽分野の創作は、すべて演奏家でもある人びとの手になっていったわけだが、ただその延長としてではない今日的な意味——時代的社会的要請といった——も最近の動きの中にはあるのではないかと思う。

作曲もする演奏家には、尺八では宮田耕八朗、村岡実、山本邦山、横山勝也、等では後藤すみ子、沢井忠夫、野坂恵子、琵琶も鶴田錦史に半田淳子が続いている。

これら主な名をあげるだけでわかるように、いずれも自らの演奏意欲で洋楽作

り、ややふざけすぎともうけとれた）なパロディを頂点に、歌や器楽のソロなども適度に配置され、各月が一環した八月「あだ」(つきうた)によって統一されていた。いまひとつ盛り上りの欲しい部分もありはしたが、いかにもこの団体らしい企画と内容で、これは是非例年の催しとして定着させて欲しいものである。

小宮多美江

曲家たちに作曲を促し、現代邦楽運動を推進してきた人たちが、彼らは、新しい作品を演奏することに自らの表現技術の発展を促すと同時に、またそれを上まわる意欲を彼らのうちにかきたてたといっているのだらう。楽器の改良を含めて驚くほどの進歩がこの十数年のうちにあった。そういうなかでの創作活動であるので、作品のなかにその楽器の技法的可能性を極限まで使いこなそうとする傾向が出てくるのはむしろ当然のなりゆきではあろう。

しかし、この演奏家による、どちらかといえば技巧の勝った作品に接すると、

率直のところ私とはまどいをおぼえる。

それはすでに、続く次代の演奏家たちの中に、人を寄せつけない、といった形容を失くしたような演奏があらわれており、余りの完璧さの故に演奏する人間の姿がみえない不満をおぼえることがあり、それと、今のべたような演奏家の創作傾向の一面とがひとつながりのものと見えなくなるからなのである。

しかしもう一方、たとえば、事と尺八の二重奏へキビタキの森（宮田耕八朗作曲）のように、むりのない技法の中で、ゆとりをもって演奏者自身も楽しむことのできる作品も生まれている。ほかにこのようなやさしくて楽しめる作品は、もしかしたら私も知らないところでもっと演奏されているのかもしれない。ぜひそうあってほしいとねがうのは、最先端をゆく演奏家たちの後ろに、実際は、無数の邦楽愛好家がついて、彼らもまた従来の

の曲にはあきたらず、かといって、余りにもむずかしい曲にはとりつけないでいるからである。要するに、やさしくて、しかも、生活感にびびったりする曲がたいへん求められているのだ。

二十絃争の場合などは、楽器が新しいためにかえってはっきりと作曲者にも「やさしい曲」を注文されている。尺八の場合も、村岡実のように家元制度で温存された固定観念から解放されて非常に自由な考えのもとに、合理的な習得の方法をさぐっている例もある。根本はむずかしく考えるのではなく、できるだけやさしく、むだなく、の方向なのである。

日本音楽集団の「演奏家による作曲へのアプローチ」も、こうした傾向の作品をどんどん生んでほしい。日常的に多くの愛好家と接している演奏家たちにこそぜひ、大衆的基礎でわきおこっている要求にこたえてほしいと思うのである。

土田貞夫

とは比べものにならない量質ともに豊かな収穫の今季であったが、鮮烈な印象を残したのはこの原稿を書いている数日前現音で聴いた篠原真の八琴のためのたゆたいと湯浅譲二の八舞動き——デルフイのための儀式よりである。

前者は西島昭子による争の独奏曲であったが、爪だけでなくマレットでも弦を弾き、貝殻、竹鳴子、ウニの殻、木片、

石などを打楽器に用い、奏法においても響いている絃の琴柱を移動させて音に変化を与える手法を効果的に生かしたりしてユニークな演奏であった。唄は、独り、夕べ、愁、虚ろ……など二十六の単語をたゆたう楽器の響きと等質に扱い、細かな陰翳のある情態を漂わせた。

後者は去年ギリシャで演奏されたもので、悪霊を払って祭りの場を潔める齊の曲であり舞いである。創作活動の尖端に立つ作曲家によってこのような原始宗教的祭祀にかかわる主題が取り上げられたことの積極的な意味を理解することなしには、少し大げさな言い方をすれば、これからの文化を論ずることは出来ないだろう。原始的な、土俗的な、それ故に根元的なものへの回帰は文明の浄化であり、歴史の進展の契機である。この曲はしかし極めて洗練された感覚で構成され書かれている。鏡獅子のような毛振りこそなかったが白毛で舞われた観世栄夫の舞いは浄めの舞いでありながら当然素朴な禊宜舞いとはひと味違った趣があり、衣ずれや足袋裏の板に擦れる音まで生かされ

ており、横山勝也の尺八やグループ72の一人が受け持った打楽器も透徹した全体の空気に融合されて窮極を思わせる澄んだ世界が舞台の上に出現した。

昨秋上演されたものでは武満徹の雅楽八秋庭歌一具が注目された。国立劇場が以前シエッタハウゼンに雅楽の作曲を依頼して失敗した不評をこの企圖は払拭したといえるだろう。六年前パリで演奏し好評であったという八秋庭歌を中心として、参音声、吹渡、塩梅、秋庭歌、吹渡二段、退出音声と大きな組曲に仕立て八秋庭歌一具として発表したもので、秋庭歌を奏する一群を舞台中央に据え、木魂一、二、三群を中央背後の上段と舞台の左右へはり出した所にまで配置する大がかりな陣立による上演であった。一部には「武満さんには雅楽の全体は理解されていない」という評もあったが、雅楽協会会長の押田氏がいうように、武満の音楽だと思っただけではよいわけで、われわれには作曲者がいうように「テロフォニー」の面白さを充分味わわせてくれた。

富樫 康

吉村七重の秋として九月十七日、ABC会館ホールで二十絃争による第一回リサイタルが開かれた。吉村七重は小柄だが器の大きい演奏者だ。音のダイナミズムは豊かで、きめ細かいデリカシーに富み、しかも確実な指さばきで演奏する。野坂恵子の一弟子として囑望されるゆえである。曲目最初の助川敏弥作曲八秋の夜は従来の奏法から余り逸脱しないで、争本来のきめの細かさや情緒

をよく表出した曲である。それでいて不協和な音程移行や、アルペジオ、或いはポルタメントの中になりに現代感覚をよみとることができるので決して陳腐さを感じない。きわめて完成度の高い作品であった。入野義朗作曲ハ二十絃と十七絃のための二つのファンタジーは従来の箏音楽の難曲に長けた奏者といえども、このような十二音作品は手のつけられないような困難さを保有しているのに、吉村と木村玲子（十七絃）は音楽にメリハリを明確につけながら、見事に弾きこなした。長沢勝俊作曲ハ遠野の里は最近ますます箏曲にすぐれた作曲をするようになった一端の表れといえる。もし宮城道雄が今なお存命していたならば、このような作曲をするのではないかと思わせる感がないでもない。堀悦子作曲ハ二十絃と尺八の二重奏曲は緊張と自由奔放の中にも抑制するものと放たれたものが牽制し合い、凝縮度の高い空間を作りだした秀逸な二重奏曲である。特に無調に綴られた尺八部分は第一トより更に難曲と思われるが、三橋貴風の技巧は見事にこれを征服した。三木総作曲ハ竜田の曲は以前二十絃エコーで吉村が非常な名演をしたのを判然と憶えている。荒々しくも激情的なハ竜田の曲は現代の箏名曲として残るだろう。

第八回野坂恵子箏リサイタル（十一月二十八日、ABC会館ホール）は、九月末にロンドンでの二度目のリサイタルを成

功裡に終えた後の報告的な意味をもち、また聴者にとっても歓迎的な気持をこめてききに行った演奏会だった。このなかで、ロンドンで世界初演したという三木総のハ東からハが披露されたが、三木はこの作品で一風変わったことをした。それは一九七四年のバリ島訪問で着想したそうだが、ガムランの音階をヒントに作曲したので、これまでの彼の作品から、大分はみ出たスタイルの音楽になったことである。だが、その魅力は格別であった。彼がガムランのモードを箏に移植すると、ジャワのガムランとは異なり、そしてまた今迄の日本の箏音楽ともちがった、異質の愛すべき音楽が奏でられた。この音を生み出すのに大分苦心したそうだが、やはり誰でもできる仕事ではないだろう。

九月二十六日のパナムジークフェスティバルでは、沢井夫妻による卓越したハ五段砦を聴取したばかりの間もなく、十月二十二日に青山タワーホールでは沢井一恵十七絃リサイタルが催された。これまで菊地悦子や宮本幸子によって独奏楽器としての座を占められた十七絃による独奏会が、沢井一恵によっても行なわれたわけである。当夜は四曲のうち片屋正邦作曲ハいするぎで示した激烈、華麗、力動感、技巧的といった、これまでは日陰者扱いされていた十七絃が、きわめて能動的な楽器になりうることを明確に認識させてくれた。そういった意味で、沢井忠夫作曲、独奏十七絃と箏群の

為のハ竜（ほむら）では、独りの十七絃が完全な主役となり、五人の十三絃が脇役を果すという、これまでの主従関係が逆転した位置におかれた合奏曲であった。伴奏部は殆どがトレモロ奏法の早い四拍子の舞曲風で、或る部分ではファリ

興味ある作品群

一九七九年の後半は、「現代邦楽」に關して言うべきことの非常に多い時期であった。いわゆるブームは去ったと言われて久しいが、そのような時期に充ちた動きの見えるのは芸術の歴史にありがちなことなのかもしれない。ここでは個々のステージよりも全体から三つの傾向をぬき出してみたい。

芸術祭（一〇・一一月）には三人の十七絃奏者が参加して三人とも受賞した。演奏会順に沢井一恵、中島清子、菊地悦子、それぞれ傾向の全く違う奏者のリサイタルが多く支持を得たということは、宮城道雄の遺産のひとつがここへ来て成熟をとげたということであろう。演奏としては沢井一恵の十七絃に野坂恵子が二十絃を弾いた入野義朗のハ二つのファンタジーに最も深く広い感銘を得た。日本音楽の地域的特性からはこの曲と演奏とは離れて行くように見えながら、より遠い地平をめざすことを可能にしているように思われる。入野の曲もそのよう

アのハ火祭りの踊りを想わせる、情熱的で燃えるような音楽だった。こうした集団演奏の美しさが箏群だけでも表現できることをわれわれは改めて知らされる思いがした。

長尾一雄

な視野によるすぐれた作品としてすでに定着しているのを感じさせる。シーズン中には吉村七重（二十絃）と木村玲子（十七絃）による別の演奏（九月）もすぐれていた。

海外においては「現代邦楽」系の成果といえは三木総のオペラハあだハがまずあげられるだろうが、われわれにはまだこの作品を完全な形で聴く機会がない。ただこの作品の前後に作曲されたハ紫の譜ハとハ東からハを、矢崎明子（二〇月）と野坂恵子（一一月）のそれぞれのリサイタルで聴くことができた。その印象では、三木に新しい時期が開けて来る感じが感じられ、それはこれまでよりも精神主義的なしるきが少なく、東洋の伝統にこれまでよりも心を開いて接して行くような傾向が生まれるのではないかと思われる。矢崎明子が地唄の三絃とうたで演奏したハ紫の譜は特にそのような傾向が明らかで、洋楽の作曲家として出た三木が、「邦楽」の作曲家に徐々に近づいて来ると言ったら言いすぎであ

るが、オペラを持って海外に出るといふ動きとは反対に「内面における帰国」を感じさせる作品だった。

ヨーロッパで作曲、演奏されていた藤原真の「争」のための「たゆたい」(九月)、デルファイの神殿で演奏された湯浅譲二の作品の一部「舞動」(十一月)が日本で演奏されたのは、海外楽壇のなかの「邦楽」の姿を垣間見ることになる。西湯昭子がパンムジークフェスティバルで独奏部門一位を得た藤原真の「争」のため「たゆたい」は、十三絃の、いわゆる

たくましきとは反対の日本的なやさしさを基調に、いくつかの素朴な打楽器と声をとともなげて演奏される、あるいは「つづやかれる」と言ってもよい作品で、「東洋の神秘」が意外にも手つかずで残っているような思いと共にほとんど文学的な日本人の「孤独」が息づいている。心なごむ作品だった。観世栄夫によって舞われた「舞動」にも古い国としての日本の匂いがある。多様な作品を聴いた下半期だったが、これらの演奏もまた極めてすぐれていた。

三橋貴風第一回尺八リサイタル

○呼竹・受竹八通り・門付・鉢返し／根笹派尺八古典本曲 ○詩曲第一番／松村植三 ○竹韻五章／諸井誠 ○委嘱初演作品・題未定／柴田南雄 ○尺八と「争」のための協奏曲第三番／唯是霞一
客演：吉村七重(「争」・二十絃)、大嶽和久(「争」)、福永千恵子(「争」)、日本音楽集団等奏者

十月三十日(木)午後七時開演 芝A B C 会館ホール
■入場料：一八〇〇円 ■チケット取扱い：渋谷東急ブレイガイド・銀座鳩居堂 ■お問い合わせ・電話予約：三橋方〇四五・五四一・五二二二 日本音楽集団〇三・四〇九・五三七四

構想2年間!!

オペラ「あだ」のロンドン公演でセンセーショナルな成功を収めた三木稔が2年の構想を経て、ここに送る……

二十絃のファンタジー「イギリス民謡曲集」

愈々7/21発売決定!!

全16曲、ポピュラーなイギリス民謡を収録!

(独奏)野坂恵子

●4/8・9、入間市民会館にて録音
●デジタル録音による高品質なサウンド



推薦

ブリタニッシュ・カウチン・ホール
ピーター・マーティン
ドナルド・ミッチェル
ライオン・出版社
ミッドランド・ミューズ・リハーサル・スタジオ

●お問い合わせは：ビクター音楽産業株式会社
〒100 東京都千代田区神田4-26-18
(原宿ビル) 電話 03(433)5151

Victor
ビクターレコード・音楽テープ



徳島における現代邦楽活動の現状と歴史

徳島現代音楽研究会 岡田寛斎

昨秋（七九年）のプログラムをみると徳島邦楽合奏団では「嬉遊曲」（中村洋一）「竹籬五章」（諸井誠）「室生の里」（元桶康明）「四群のための形象」（三木稔）「尺八三重奏」（清瀬保二）「二つの舞曲」（長沢勝俊）とあり、辺鄙な地方の番組としては良い内容をもった演奏会だと思ふ。徳島大学等尺八部では「絲竹交響」他六曲で例年一曲は大合奏曲に取りくんでいる。又、徳島文理大学等曲部、四国女子大等曲部とも小規模ながらよく活動している。さて各演奏会の始まりは、徳大七二年より、文理大七三年より、四国女子大七四年からで、三校共同に発展したことがわかる。

六九年以来私は現代邦楽の啓蒙活動を進めていたが、七二年に若い邦楽愛好家と学生を主力とするグループ「阿波」を結成し、郷土の偉大な先達三木稔氏から助言と協力を戴き、強力にこの新しい運動を推進させた。この活動の結果として、各学生、クラブ全体を自覚めさせ発奮させえたわけである。以後四国学生邦楽連盟結成等大きく発展を遂げている。

さて三大学のリーダー的位置にある徳島邦楽合奏団のなりたちは、七二年に前記のグループ阿波が発展解消して、徳島邦楽集団へ引継がれ活潑に活動していた。しかし七四年春、団員の移動（転勤、

卒業等）が多く、自然消滅の危機を避えてしまった。私自身は不可抗力であると考えしばらく様子を見ようと思っていた。ちょうどその消滅の話を聞いた清水義矩氏（集団団友）と話し合う機会があり、深夜眠い目をこすりながら邦楽の前途、日本音楽の新しい伝統を築く私達の使命についてじっくり話し合った。

彼は当時日本音楽集団の一員として活動し、殊にマネージメントを担当して、ある限界をひしひしと感じていた。その頃、集団は次々と新しい作品で金字塔をうちたてヨーロッパ巡演等華々しい発展を続けていたが、一方地方に目をやると、地域の合奏団が少くないのは勿論、集団の知名度も零に等しい有様だった。団員全員が真摯に日本の音楽を考え、苦悩をかえて活動している芸術集団も、大衆の前には流行歌手一人にかなわない不幸な存在だった。彼は集団の発展と、この価値ある芸術運動の推進に、もっと良い方法はないものかと日夜熟慮していた。それは何と云っても現代邦楽の理解者をふやすことが一番であろう。集団のような合奏団体が全国に生れ発展し、それぞれローカルカラーを大切に個性ある音楽を醸成醸成してこそ、生き生きとした現代の日本人の音楽が育つのではないだろうか。東京だけが音楽の中心であっては

ならない。地域の音楽が向上し、そして又東京の音楽がより内容をもった優れた作品が育つことこそ、ほんとうの望ましい姿ではないだろうか。彼は一般的な一方的な東京指向をするべく批判し、地方の主体性の重要性を主張した。この彼の熱意ある説得に感動し、私は彼の意見の具体化を直ちに実行にうつした。

ついに清水義矩氏を常任指揮者とする「徳島邦楽合奏団」が誕生した。（彼の苦難の道は集団在団時代より一層けわしくなっていくのだが……）

発団はしたとはいえ、純粋のアマチュア合奏団はちょっと気をぬくとかたむきかける。昨年第四回定期を行なったが、直後真空期間があり、息切れの状態を続

けている。ずっと過れば十年を超える歴史がある訳で、この灯を消すことなく発展させてほしいものだ。清水氏が身を挺して奮闘努力されたり、集団をはじめ全国の同志の皆様のお力のおかげで、良き理解者が着実に増加していることは大変喜ばしいことである。日本音楽協会の横のつながりが旨くゆき、互いの合奏団が有機的に影響し合って発展向上されんことを切に願っている。

私自身は二年前より現代音楽研究会をもち、邦楽と洋楽のワクを取りはらい、全ての音楽についてコンテンポラリーな感覚と視野をもって、音楽とは何かという大きなテーマを考えながら現代邦楽の理解をも推進しているつもりである。

第一回北村玲子・三絃演奏会

- 落葉の踊／宮城道雄 ○磯千鳥／菊岡俊校
- 第二重奏による小組曲／小野衛
- 四重奏曲「相剋」／牧野由多可
- 賛助出演 吉川富子（箏・三絃）、小野正志（十七絃）、町田徳（箏）、三橋貴風（尺八）
- 七月三日（木）午後七時開演 東邦生命ホール（渋谷）
- 入場料 一五〇〇円（全自由）
- 問い合わせ 七〇三・七九〇六 北村方

のだから、日本音楽側が、別の金庫を切実に要求して、家元制度という便利なものを作成したのは、まさに必要悪そのものであったろう。

この必要悪があつてこそ、日本の伝統が保守し得た、それではなければ、西欧的合理化的の中で、日本のなものは確實に滅んでゐた、という説の前に、いう言葉がない。問題は、異常な封建社会の中で形成されたものを、伝統という美しい隠れ蓑(みの)で覆いつくしてよいかどうかにある。Traditionという概念が、創造

という意味を常に伴うべきである、という説に同感する私だが、創造の帰結として、西洋が成し遂げたような近代文化に先がなく、保守的・非人間的なものが美しく見えるムードを、極めて危険に思わざるを得ない。私自身は陰を憚れる面もあるし、陰りのない文化はウツだと信じているが、そのみが強調されると怖い。

いずれ、怪物的不滅性がますます信仰される家元制度は、殺傷沙汰などによつては、いささかも侵されることはあるまい。そんな方法でなく、健康を望む人たちの中で、今日の人間の心をつつ開放的で新しく自然な律が、芽生え、育ち、枝を上げ、樹下に多くの人が頼り寄れるような制度の準備が望まれる。

心ある人びとが、自由にいずれをも選
択できるようになれば、不必要な悪の部
分から、いつとはなく崩れ落ちるに違ひ

ない。平和で民主的な解決は、常に選択の自由から始められる。

昨年十二月の関西五ヶ所の公演のうち和歌山は労音の協力を得ながら、いわゆる動員に成功しなかった箇所ですが、その労音関係者からの感想をいくつか……。

○舞台の徹底した明るさに感動しました（客数が少ないにもかかわらず）。

○あの大きな貴重な運動をやっているわ
りに、事務所が小さく、汚ない。こんな
環境に置いて良いのかと、申し訳けなく
思います。

○過去五年間の労音例会の中でも最高に良かった演奏会……とアンケートに書いてくれた人が、案外多かったです。
○今の若い人にどうしても聞いてほしかったです。

○聴くまであんな音楽だなんて全然知らなかつたんです。なんで前にもっと、こういうものだって教えてくれないんですか。

○あんな良いものだったら、もっと一生けんめい(広報活動を)やったのにな。
○音楽集団というのはこういうもんだっていうのはわかるけど、なぜ、いま音楽集団をやらなければならないか、ということもほしい。

——事務所が汚くても、お客さんが少ない
くても集団はどこまでも無欲で、明る

いようです。良きにつけ、悪きにつけ。

その晩半版 芸能界7年 に次のような川柳が載りました。芸術じゃなく、だれでも知っている芸能界の話題の中に、ボツンとひとつお堅いものが混った感じがしたが、本人はこんなのが一番光栄なんだと喜んでいるようです。

ロイヤルの「あだ」を三木稔
ロンドンで討ち

話題から

□五十四年度「芸術祭優秀賞」を集団間
係で三件受賞

レコード部門では、カメラータ・トキオウ発売の四枚組のアルバム「野坂東子・三木稔——二十絃争の世界」が受賞。「従来の十三絃争の表現力をさらに一段と拡大し、これをコンサートのための独立した楽器に成長させた野坂、三木の二人の軌跡をたどるアルバムで、二十絃争の代表曲を集成してすぐれた演奏を示すとともに、この楽器による音楽のひとつの到達点をも示した」というのが受賞理由。昨年は二十絃争の十周年で、よい記念になったと言えます。

音楽部門では、団友の矢崎明子さん。「矢崎明子地歌三絃リサイタル」の演奏

で、菊地慎子さんが一菊地慎子十七絃によるリサイタル」の演奏でそれぞれ受賞しました。

「クルー・フ星群」フランスを巡り帰国

当時の藤倉成敏（打楽器）と平田淳（琵琶）が加わって、打楽器、義太夫、箏などの若手邦楽家総勢十一名の「グループ星群」が、フランスの青少年音楽団体との演奏交流の第十一回目として、尾音から派遣されました。二月二十八日から三月二十五日まで、パリで二回、ブルゴーニュ、フランシュ・コンテ、ロレーヌ、アルザスを回り公演を三十五回行ってきました。「一般的になじみの少ない地方都市を回ったので、日本の音楽を初めて聴く人が多く、それだけ反響も大きかったです。」フランス人はこういうところで歴史を積んできたんだな、と思える地方都市の姿には感銘を受けました」（藤倉談）。尚、藤倉はこの公演でプロデュースの腕を上げたもよう。集団の海外公演のプロデューサー・三木稔は今後集団のプロデューサー・チームに入り片断となっていくるものと期待をかけています。

□野坂恵子「サントリー音楽賞」にノミ
ネートされる

当国首席独奏者の野坂恵子(二十絃箏)が第十一回のサントリー音楽賞にノミネ

ートされました。このサントリー音楽賞は、洋楽関係の個人又は団体を対象にするとうたっており、審査の席上でも事は対象外ではないかという声があったそうです。受賞は違いましたが、最終的に受賞者の吉原すみれ氏といずれをとるかで争われたと新聞は伝えています。賞金三百万円、惜しかったですね。

□男の魅力で迫まる「尺八ソリスデン」誕生

集団の尺八若手四人衆(三橋、福田、田嶋、藤崎)が、「尺八ソリスデン」を

昨春結成。演歌から現代音楽まで演奏するという、幅広い活動を目指すとのこと。ちなみにこの一年の活躍ぶりは——二枚のレコード録音(コロムビア発売、「日本の詩情」「古賀メロデー」)、ラジオの二時間番組でジャズ・コンボとの競演から、テレビ「ほんものは誰だ」出演に至るまで。中でもレコード「古賀メロデー」は大好評発売中。今年、十二月十九日(金)には、ヤクルト・ホールで「尺八ソリスデン・クリスマス・コンサート」を開催、又、レコード「尺八・グリーンミラー・サウンド」も発売予定。

一九八〇年度日本音楽集団西日本公演の予定

九州地方方面

参加者一節 藤崎重康/尺八 宮田耕八 朗・福田輝久・田嶋直士/三味線 森田司郎/琵琶 半田淳子/箏・十七絃 白根きぬ子・吉村七重・滝田美智子/三味線・十七絃 宮越圭子/打楽器 尾崎太一・黒坂昇・前田文男/指揮 田村拓男 日時・会場・曲目(☆は現地問い合わせ先)
大牟田 六月十四日(土) 市民会館
新越後獅子/ひなぶり/子供のための組曲/瀬河/四季・ダンス コンサート I ☆市民音楽会事務所電話五四〇五四〇 長崎 六月十五日(日) 市民会館文化ホール

新越後獅子/ひなぶり/子供のための組曲/瀬河/四季・ダンス コンサート I ☆長崎労働 電話二二一八六八三
佐賀 六月十六日(月) 佐賀市民会館
新越後獅子/ひなぶり/子供のための組曲/瀬河/四季・ダンス コンサート I ☆佐賀労働 電話二六一一三六六
熊本 六月十七日(火) 郵便貯金ホール ※
新越後獅子/キビタキの森(宮田作曲)/子供のための組曲/瀬河/四季・ダンス コンサート I ☆日本音楽協会熊本支部 電話六四一九三〇四
福岡 六月十八日(水) 少年文化会館

新越後獅子/キビタキの森/子供のための組曲/瀬河/四季・ダンス コンサート I ☆福岡労働 電話七五一三三六六

四国・中国地方方面

参加者一節 藤崎重康/尺八 坂田誠山・三橋貴風・田嶋直士/三味線 加藤洋・花房はるえ/琵琶 半田淳子・田原順子/胡弓 畦地慶司/箏・十七絃 野坂恵子・砂崎知子・吉村七重・木村玲子・滝田美智子・内藤洋子/打楽器 藤倉成敏・堅田啓輝・高橋明邦/指揮 田村拓男 岡山 六月十九日(木) 市民文化ホール ※
新八千代獅子/華やき/ファンタスマゴリア/萌春/巨火
☆児玉 電話〇八六四二四二七六八
高松 六月二十日(金) 四国新聞社ホール ※
新八千代獅子/ファンタスマゴリア/鳴門秘帖・ダンス・コンサート II/華やき/巨火 ☆総合クリエイティブ 電話三三三四五一
高知 六月二十一日(土) 県民文化ホール
新八千代獅子/萌春/ファンタスマゴリア/華やき/巨火
☆県民文化ホール 電話二四一五三二一
徳島 六月二十三日(月) 郷土文化会館 ※
新八千代獅子/ファンタスマゴリア/鳴門秘帖・ダンス・コンサート II/華やき/巨火 ☆岡田楽器電話五二一六四四五
松山 六月二十四日(火) 市民会館中 ※
新八千代獅子/みち/ファンタスマゴリア

ア/ひなぶり/巨火
☆今井藤初 電話二二一七四四九
広島 六月二十五日(水)
エリザベト音楽大ホール ※

新八千代獅子/箏と琵琶のための「行」(伴谷晃二作曲)/ファンタスマゴリア/ひなぶり/巨火 ☆森岡幸雄 電話〇八三三三三三九六九六
天理 六月二十七日(金) 市民会館
瀬路/ソネット/子供のための組曲/ひなぶり/四季・ダンス・コンサート I ☆天理教道友社 電話三三三三二二六
■開演 午後六時半(天理のみ五時半)
■入場料 ※印は前売 二〇〇円、当日 売二五〇円

○表中、子供のための組曲、瀬河、瀬路、萌春、ファンタスマゴリア、みちは長沢勝俊作品。ひなぶり、四季・ダンス・コンサート I、鳴門秘帖・ダンス・コンサート II、華やき、巨火、ソネットは三木稔作品。

○表中、ソロ、小編成の曲の奏者は次の通り。
瀬河・琵琶と歌 半田/瀬路・笛 藤崎、打楽器 尾崎・黒坂(又は高橋) 萌春・尺八 坂田、箏 砂崎/華やき 二十絃 野坂/ひなぶり 尺八 坂田、福田、田嶋のいずれか、二十絃 野坂、又は吉村/ソネット 尺八 坂田、三橋、田嶋/キビタキの森 尺八 宮田、箏 白根

一九七九年度日本音楽集団東海・近畿公演の記録

□その一——九月公演

参加者——笛：藤崎重康／尺八：宮田耕八朗
（ハキビタキの森／二重奏出演）：坂田誠山、
福田輝久、田嶋直士／三味線：杉浦弘和（ハ去
来／ソロ）、太田幸子／琵琶：半田淳子／琴、
十七絃：坂井敏子、白根きぬ子（ハキビタキ
の森／二重奏）、花房はるえ、滝田美智子、
打楽器：尾崎太一、藤倉成敏、堅田修輝、黒
坂昇／指揮：田村拓男 作曲：長沢勝俊
日時・会場・曲目

名古屋 十一日（火）名古屋市民会館中ホール
新越後獅子／ハキビタキの森（宮田作曲）／デ
ィヴェルティメント（佐藤敏直作曲）／ダン
ス・コンセルタントⅡ／ハ鳴門秘帖Ⅱより（三
木稔作曲）
岐阜 十二日（水）岐阜産業文化ホール
新越後獅子／ディヴェルティメント／ダンス、
コンセルタントⅡ／ハ鳴門秘帖Ⅱより（二つの
舞曲）（長沢作曲）

豊橋 十三日（木）豊橋市民文化会館
新越後獅子／去来／ディヴェルティメント／
ダンス・コンセルタントⅡ／ハ鳴門秘帖Ⅱより
奈良 十四日（金）奈良文化会館
プログラムは岐阜公演と同じ。

□その二——十二月公演
参加者——笛：望月太八・藤崎重康／尺八：宮
田耕八朗（ハ 鶴の巣籠／ハ尺八協奏曲）

のソロ）、坂田誠山（ハ 鶴の巣籠／ソロ）、三味
線：田嶋直士／三味線：杉浦弘和／琵琶：
半田淳子（ハ 湖水乗切／ソロ）、田原順子、
琴、太極三味線：坂井敏子／琴、十七絃：野
坂恵子（ハ 華やき／ソロ）、砂崎知子、吉村
七重、木村玲子、滝田美智子、熊沢栄利子、
胡弓：畦地慶司、打楽器：尾崎太一、藤倉成
敏、堅田修輝、高橋明邦／指揮：田村拓男、
作曲：長沢勝俊、三木稔
日時・会場・曲目

津 十七日（月）三重県文化会館
新越後獅子／飛騨によせる三つのバラード（長
沢作曲）／ファンタスマゴリア（長沢作曲）
／孤鶯（三木作曲）／巨火（三木作曲）
大津 十八日（火）大津市民会館
新越後獅子／ソネット（三木作曲）／ファン
タスマゴリア／湖水乗切／巨火

大阪——第五回関西定期 十二月二十日（木）
厚生年金会館中ホール
新越後獅子／尺八協奏曲（長沢作曲）／華や
き／巨火
和歌山 二十一日（金）
和歌山市民会館小ホール
新越後獅子／飛騨によせる三つのバラード／
ファンタスマゴリア／鶴の巣籠／巨火
姫路 二十二日（土）姫路市民会館
新越後獅子／ソネット／ファンタスマゴリア
／華やき（三木作曲）／巨火

新越後獅子／ソネット／ファンタスマゴリア
／華やき（三木作曲）／巨火

日本の音、その磨きぬかれたひびき



都山、琴古、銘木もみじ材
1尺3寸より2尺6寸まで各寸管あります。

◆ドレミ音階 横笛・立笛

紫檀材 6,000円～10,000円
花梨材 5,000円～9,000円
楓材 4,000円～8,000円



銘木尺八の元祖

◆銘木尺八

紫檀高級管 1.6/1.8のみ……60,000円
花梨高級管 1.6/1.8のみ……40,000円
合竹高級管 各寸あり……30,000円
調律普及管 1.8のみ……12,000円

※送料・送料運賃・送料を別添の表に記します。

銘木尺八
(フタナギ)

このマークが
品質の保証です

(株)ワダ楽器

〒539 18 富山県富山郡城南町後家451
TEL 07636 2 2368・2 2221

尺八 鶴の店

〒166 東京都杉並区阿部3丁目5-3
TEL 03 333 393 4680

- 尺八のことなら全て揃う尺八専門店です。
- 通信販売も行なっておりますのでカタログご希望の方はご請求下されば無料進呈致します。
- お求めは全国有名デパート・楽器店にてお願いいたします。
- 尺八のことなら何でもご相談に応じます。(尺八鶴の店)



あなたの楽器も
危険にさらされています。
火事・破損・盗難にそなえ
保険をかけましょう。

突然の火災・盗難・交通事故…あらゆる災害が
待ち受ける現代。綱渡りのような生活はしたくない
ものです。損害保険は、暮らしをより確かなものにし
ます。大切に育ててきた幸せな生活。東京海上の損害
保険は、これからも多くの方々の幸せを守り続けます。
(楽器の保険も備えております。)

東京都千代田区丸の内1-2-1

海上商事株式会社

電話 (212) 0866 代表

東京海上火災保険株式会社

本店/東京都千代田区丸の内1-2-1
TEL (212) 6211 (大代表)

これはちょっとした驚ろきだ。

この曲の最後、『冬』のソネットは「これが冬だ、冬もこんなに楽しみがある」という一行で結ばれる。

私は「これも箏だ、箏にもこんな楽しみがある」と、今実感している。一方、バロック・ファンにも「これが『四季』だ、『四季』にもこんな楽しみ方がある」と声を立てる人が沢山いるにちがいない。

三木 稔



ヴィヴァルディ

四季

●TA-60060 30cmステレオLP ¥2,000
●ZA-2031 カセット・テープ ¥2,000

琴=ニューアンサンブル
指揮=三石精一
プリマ=砂崎知子

第一等=中丸晴美/第二等=森千恵子
第三等=花房はるえ
第一十七絃琴=沢井一恵
第二十七絃琴=蔵本エリ子



琴 モーツァルト ●TA-77042 ¥2,300
●ZP20-105(カセット) ¥2,000

●セレナード ト長調 アイネ・クライネ・
ナハトムジーク K. 525
●交響曲第40番 ト長調 K. 550 ●指揮: 福村芳一

琴 ヘンデル ●TA-72048 ¥2,300

●組曲・水上の音楽 ●組曲・王宮の花火の音楽
●指揮: 福村芳一



TOSHIBA EMI

日本音楽集団第五回作曲公募の結果報告

今回で日本音楽集団の作曲公募も第五回を迎えました。全部で七篇寄せられましたが、中には二回、三回目出品の常連もいて、驚かすところとないところとが、又は全く未知の方の作品を前に、審査員の批評談議が弾みました。そして、今回は、第一位なしの二位に佐藤隆氏の八春響が選ばれました。佐藤氏も常連の一人で三回目の応募、第一回、第三回に続いて三度目の入選です。

してもっと積極的な探求心をもってもらいたいとのことです。

次回は柴田南雄氏と日本音楽集団で当り、第二次予選を公開演奏(但し、パトナは参加者が作成、入賞分は事後に集団が実費を支払う)をしよう、と集団では張切っています。どうぞ奮って応募下さい。

【第二位入選(第一位なし)】
佐藤隆作曲「春響」

佐藤氏は一九四五年生まれ。弘前大学卒業、阿保健に作曲を師事。現在、青森県作曲研究会会員、青森県緑ヶ沢高等学校勤務。

代表作——
「弦楽器のための White Music」,
「Fare Away」(ピアノ曲)他。

日本音楽集団第六回作曲公募

伝統音楽に関心のあるすべての作曲家に創作の機会を開放し、毎春の総合定期演奏会で上演するための新作を左記の要領で公募いたします。当集団の演奏する範囲は、独奏から大きな合奏に至るまで多岐にわたっていますが、この作品公募では日本音楽集団が合奏するときの一番スタンダードな左記の編成に近いものを望みます。

審査は総譜を提出して頂き、譜面審査

によって第一次審査を行い、これを通してした作品は公開演奏による本選にかけられます。又、第一位作品を日本音楽集団作曲賞受賞作とすることもあります。

記

●楽器編成 横笛(篠笛もしくは能管、持棒も可)1、尺八2、三味線(細棒・中棒・太棒のいずれか)1、琵琶(筑前又は薩摩)1、箏(十三絃又は二十絃)2、十七絃1、打楽器各種(演奏者数2)(但し以上の標準編成より三名程度まで減員可、又、洋楽器及び声楽は原則として含まないこと)

●楽曲の形式 自由

●演奏時間 十五分前後

●募集締切 一九八〇年十一月十五日(月)

(日本音楽集団事務所提出、簡単な経歴を添えること)

●発表 予選 一九八一年一月中旬

●本選 公開審査数日後

●入選作の初演 第一位入選作は日本音楽集団の定期演奏会で初演します。また他の入選作品についてもできる限り上演機会を得られるよう努力します。

●賞金 第一位 二十万円、第二、第三位 各五万円

●入選作の権利 日本音楽集団が初演権を持つ以外、全ての権利は作曲者に帰属します。

●審査 今回の審査は柴田南雄氏と日本音楽集団であつたります。審査員は毎年変わりますので、傾向を考慮して応募なさってもけっこうです。又、今年採用されなくても同じ作品(未発表のもの)を次回に応募してもかまいません。

●三人の十七絃奏者による演奏会

○落葉歌(くごか) 伊福部 昭作曲

○火垂(ほたる) 沢井 忠夫作曲

○風八十七絃独奏による主題と変奏 牧野由多可作曲

○十七絃のためのロマネスク 岡田 京子作曲

○遊響八十七絃三重奏曲 牧野由多可作曲(委嘱・初演)

演奏 菊地隼子・宮本幸子・沢井一恵

六月二十三日(月)午後七時開演 芝ABC会館ホール ■二〇〇〇円

■マネージメント・カメラ・トウキ。ウ〇三・四〇五・六〇八一

涼風吹き渡る夏の軽井沢で、邦楽器の合奏を楽しみませんか。

第十回日本音楽集団夏期合奏研究会

合奏研究会も早十年目を迎えました。団員一同この「確かな歩み」が今後ますます広がることを願っております。さて今回も魅力溢れる企画が、皆さま方をお待ちしています。楽器を始めて間もない方、五線譜になじみのない方には「初級教室」。

中・上級の方には、大編成の曲から、細かい指導の受けられる各々の楽器別の曲まで、多彩な準備をしております。なお第十回を記念して、日本音楽集団オリジナルTシャツをプレゼント致します。

さあ、多くの仲間との交流ある楽しい勉強の場に、あなたも参加してみませんか。

○期間 前期 八月七日(木)～十日(日) 後期 八月十日(日)～十三日(水)

(前後期通しも可)

○会場 北軽井沢ミニジャック・ホール ○募集楽器 笛・尺八・三味線・琵琶・胡弓・箏・二十絃箏・十七絃・打楽器・作曲・編曲教室・見学

○会費 三二、〇〇〇円(三食、記念オリジナルTシャツ付) 団体・友の会割引有り。

○教材 次々にタイトル／作曲者(楽器編成)の順で表示します。

大編成曲——子供のための組曲／長沢、ダンス・コンセルタントⅢ／八郎物語／

三木、初級合奏曲——虹の輪／長沢、月の出／三木、雨あがり／内田(以上三曲は今回のために作曲)

中・小編成曲——みち／長沢(笛・尺八・三味線・琵琶・箏3・十七絃)、松よ／三木

(笛・尺八・二十絃箏・箏2・十七絃)、鳩のいる風景／佐藤敬直(尺八2)、

春三題／長沢(箏・三味線)、キビタキの森／宮田(尺八・箏)、響／田村(尺八・

箏)、「コトの本」他／三木、野坂、太鼓の曲／竹屋正邦(三味線2・締太鼓)、二

十絃箏教室(イギリス民謡集)、胡弓教室、琵琶教室、作曲・編曲教室

詳しい案内書・申し込み用紙ご希望の方は、六十円切手同封の上、集団の事務局へ

お申し込み下さい。

第三回日本音楽協会フェスティバル

五月二十四日(土)

東京都勤労福祉会館

全国各地の邦楽器のアマチュア合奏団が集まり、親睦を深めるコンサート、第三回の日本音楽協会フェスティバルが今年も開催されます。これを機会に合奏団に参

加したいと思われる方もいらっしゃるのではないかと思います。ぜひご来場下さい。参加合奏団と曲目は次の通りです。(順不同)

○星組合奏団——古代舞曲によるパラフレーズ／三木稔作曲

○合奏団たあく——ディズニーテイメント／佐藤敬直作曲

○合奏団鼎——二つの舞曲／長沢勝俊作曲

○合奏団遊——ダンス・コンセルタントⅢ／八郎物語／三木稔作曲

○合奏団みずほ——飛騨によせる三つのバラード／長沢勝俊作曲

○NHK邦楽技能者育成会第二十四期生有志——風土韻律／竹屋正邦作曲

○特別出演・日本音楽集団——……?

開演 午後二時 入場料 一〇〇〇円

日本音楽協会合奏団——日本の楽器を演奏するアマチュアの方々へ

毎週一回集まって邦楽器による合奏を楽しむアマチュアのグループです。もちろん流派などは問わず、どなたでも参加できます。次のように、現在全国で五つ、海外に一つあります。(東京の方は友の会A会員に同時入会になります。A会員について詳しくは21ページ参照)

東京——毎週土曜日には三十余名の方が午後四時から六時まで(星組合奏団)、

火曜日には二十数名の方が午後六時から八時まで(合奏団たあく)合奏を楽しんでいます。ご希望の方は集団事務局へお問い合わせ下さい。

関西——関西方面では合奏団「鼎」(かなえ)が、三十余名の会員を有し活躍しています。練習場、練習時間などは、大崎じゅん〇七七四九一四一三〇三四までお問い合わせ下さい。

名古屋——名古屋は合奏団「みずほ」。昨年十一月に約二十名で結成されました。

メンバーは愛知、三重、岐阜と広範囲にわたっているそうです。ご連絡は横川克久

〇五八五四五—五七五六まで。

仙台——昨年九月に結成、メンバーは十八名。仙台的合奏団「遊」の連絡先は、

山本昌子六二—九一四〇まで。

ハワイ——昨年夏に集団がハワイ公演を行ったのがきっかけで、ハワイ大学の学

生中心にメンバー十名余りで九月に結成。(Nipponia Hawaii Ensemble)。住

所は本誌47ページをご覧ください。

日本音楽集団及び団員等に関する今後の予定(現在決まっている十月までのもの)。

太字は集団主催。学校公演などは省略します。

五月二十三日(金)

田嶋直士第一回尺八リサイタル(P.12参照)

五月二十四日(土)

青山タワー・ホール

五月二十四日(土)

日本音楽協会第三回フニステイバル(P.44)

六月二日(月)

東京都勤労福祉会館

六月二日(月)

西川浩平の笛リサイタル(P.12)

六月九日(月)

東京・芝ABC会館ホール

六月七日(土)

西川浩平の笛リサイタル 大阪・堂島毎日国際サロン

※一九七七年、芸術祭オーフニング公演として国立大劇場で行われた企画を延長して行うもの。二期会の著名な歌手たちが出演します。なつかしのメロディと邦楽器が、まるでオリジナルではなかったかと思うほど融合合うさまに「期待下さい」。

六月十日(火)

日生劇場

六月十四日(土)

五月定期演奏会——胡弓特集(P.20) 青山タワー・ホール

六月十四日(土)

一九八〇年度日本音楽集団西日本公演(P.39)

六月十四日(土)

14日大牟田・15日長崎・16日佐賀・17日熊本・18日福岡・19日岡山・20日高松・

21日高知・23日徳島・24日松山・25日広島・27日天理

六月二十三日(月)

三人の十七絃奏者——菊地惺子・宮本幸子・沢井一恵——による演奏会

六月二十七日(金)

芝ABC会館ホール

六月二十七日(金)

愛のコンサート「語りあい」で、集団と北村英治オールスターズが共演

六月十一日(水)

東京郵便貯金ホール

六月十一日(水)

イギリスのオールドバラ音楽祭で三木絵作曲「SHIRABE」がピーター・ピアーズのデナー・ソロとハーブで初演

七月一日(火)

横山勝也・野坂恵子ジョイント・リサイタル

七月七日(月)

都市センター・ホール

七月七日(月)

第60定期演奏会——日本民謡を採って(P.20)

七月十九日(土)

青山タワー・ホール

八月七日(木)

日本音楽集団富士演奏会

八月七日(木)

第十回夏期合奏研究会(P.44)

九月十二日(金)

北軽井沢ミュージック・ホール

九月二十九日(月)

「武蔵野市民コンサート」に集団が出演 武蔵野公会堂

九月二十九日(月)

野坂恵子京都リサイタル(P.45) 京都芸術文化会館

十月六日(月)(予定)

野坂恵子福岡リサイタル

会場未定

一九八〇年度後期コンサート・シリーズ

十月十四日(火)

都市センター・ホール

十一月十二日(水)

第61秋の総合定期演奏会

十二月八日(月)

第62定期演奏会

第63定期演奏会

青山タワー・ホール

日本音楽集団のマーク募集

日本音楽集団では、集団を象徴するマークを募集しています。最終的には専門のデザイナーの手に委ねる予定ですが、皆様のアイデアをお待ちしています。締切りは六月十日、採用の際は記念品を差し上げます。

★日本音楽集団は東京音楽大学民族音楽研究所の協力団体で、同大学の好意により

C-四〇三教室を練習場として使用しております。練習場の電話は、九八三二八〇九六(直通)です。

野坂恵子京都リサイタル

○天如 ○佐保の曲・竜田の曲

○東のうた・西のうた わらべ唄によせて／ダグリン・スリブス／

誰かさんと誰かさんが麦畑／ロンドンデリー／エアなど ○華やき

●作曲と解説 三木絵

九月二十九日(月)六時半 京都芸術文化会館 ■入場料：二〇〇〇円

■お問い合わせ・電話予約：田嶋直士〇七二二一三六二二四二三

南昭子七二〇一三三二二四六〇 日本音楽集団〇三二四〇九一五三七四

代表 長沢 勝俊

音楽監督 三木 稔

首席独奏者 野坂 恵子

宮田耕八朗

常任指揮者 田村 拓男

(以上五名で幹部会を構成する)

運営委員長 坂田 誠山

〈演奏部〉

望月 太八(笛)

宮田耕八朗(尺八・笛)

坂田 誠山(尺八) *

三橋 貴風(尺八) *

福田 輝久(尺八) *

田嶋 直士(尺八)

藤崎 重康(尺八・笛) *

竹井 誠(尺八)

睦地 慶司(胡弓・笙・作曲)

太田 幸子(三味線)

〈賛助会員〉

(有)琴光堂和楽器店(松本・諏訪・東京)

滝沢 修 高瀬 卓郎

野坂 操寿 富島 邦子

鶴田 錦史 半田多真美

三木 卓雄 古川羽衣山

渡辺 精一 丹野井成寿

事務局長 奈良 義寛

事務局 本國 光子(経理)

会計監査 富島 素子(文芸)

会 計 監 査 芹沢 英雄

マネージメント協力(国内及び海外)

株式会社ジャパン・アーツ

半田 淳子(琵琶)

田原 順子(琵琶)

坂井 敏子(箏・三味線・胡弓)

白根きぬ子(箏)

宮本 幸子(箏)

野坂 恵子(箏・三味線)

砂崎 知子(箏・三味線・胡弓)

吉村 七重(箏) *

花房はるえ(箏・三味線)

宮越 圭子(箏・三味線)

木村 玲子(箏)

〈団友〉

青木 誠 戸井 昌造 清水 義矩

秋浜 悟史 藤倉 昌悦 芹沢 英雄

荒谷 俊治 仲保申喜男 高野 文子

小田切清光 中村 八大 田中 利光

川崎 祥悦 野口 誠 広瀬 量平

菊地 錦子 野口美恵子 鯉沼 広行

楠 知子 佐藤 敏直 鳳声 晴由

鞍掛 昭二 芝 祐清 星 旭

本奥靖志子(箏)

内藤 洋子(箏)

尾崎 太一(打楽器)

藤倉 成敏(打楽器)

堅田 啓輝(打楽器)

高橋 明邦(打楽器・トレンナー) *

黒坂 昇(打楽器)

田村 拓男(指揮・打楽器)

稲田 康(指揮)

研究団員

滝田美智子(箏)

田嶋恵美子(箏)

菅田 司郎(三味線)

米澤 浩(尺八)

熊沢栄利子(尺八)

加藤 洋(三味線)

松本 和美(箏)

佐藤 里美(箏)

出口 裕子(箏)

水越 敏雅(打楽器)

増田 睦実 デイヴィッド・ロープ

元橋 康男 デイヴィッド・ヒューズ

矢崎 明子 (ヘンリー・バーネット

柳家小三治 ラニー・シュルダン

西川 浩平

〈維持会友〉

AOIミュージック株式会社

株式会社西友ストア

前田 文男(打楽器)

*第九期研究団員は九月に登録されます。

〈作曲部〉

長沢 勝俊

三木 稔

内田とも子

研究団員

関川 多嘉

〈文芸部〉

中島 隆

名譽団員

山田美喜子(琵琶)

伊藤 惣一(演技)

協力団員

地方在住団員

塚本 早苗(箏)

休団中団員

杉浦 弘和(三味線)

*印は本年度運営委員
昭和五十五年四月現在

株式会社豊島園 (有)奈良屋洋品店

(株)ノサカ 日本オペラ協会

西武建設株式会社 菱電商事株式会社

西武鉄道株式会社 宮園自動車

西武百貨店 宮園オート

青柳 孝年 稲木 一 岡 昇三

赤木 明 榎本美保子 金子 博美

朝吹 英一 榎本 容三 家根原光子

井阪 敏 遠藤 将一 龜田 和保

河野 義博 武江 利博 永根 玲子 旗野 忠美 福田 洋一 松原 剛
 近藤 栄一 田村 鎮男 根志 彰 早川 佐知子 星 光和 柳田 正治
 國持 光生 寺島 孝之 新倉 鶴子 原 順一郎 譚 穂 吉岡 紘子
 高橋 克己 内藤 国枝 野坂 純一 柳川 創造 松井 翠

日本音楽協会

協会世話人

長沢勝俊(代表)・三木 稔・野坂恵子・宮田耕八朗・杉浦弘和・田村拓男・山田
 美喜子・坂井敏子・坂田誠山・田嶋直士・奈良義寛・芹沢英雄

協会支部

関西支部 田嶋直士 (代表) 田嶋直士 (代表)
 水戸支部 齊藤幸山 (代表) 齊藤幸山 (代表)
 長野支部 佐藤幸宇山 (代表) 佐藤幸宇山 (代表)
 山梨支部 郷見 (代表) 郷見 (代表)
 長崎支部 牧山雅楽部 (代表) 牧山雅楽部 (代表)
 熊本支部 古川羽衣山 (代表) 古川羽衣山 (代表)
 秋田支部 野口裕子 (代表) 野口裕子 (代表)
 の会つばら事務局

協会合奏団

「星組」合奏団(代表・関根康雄)
 合奏団「たあく」(代表・秋本輝夫)
 合奏団「鼎」(代表・北脇道夫)
 合奏団「游」(代表・山本昌子)
 グループ・みずほ(代表・相川克久)
 Nipponia Hawaii Ensemble (June Philip U.S.A.)
 関西音楽集団 (代表・)

いま、世界の熱い視線を
 あびて!!

みやび

〜華麗なる箏〜
 華やき/乱輪舌
 六段/新八千代獅子



- 二十絃箏・箏
野坂恵子
- 演奏
日本音楽集団
- WX-7510 ¥2,500

野坂恵子古典箏曲集

- 第一集 ▶CLS-5168
千鳥の曲/八段/砦/四季の眺
- 第二集 ▶CLS-5169
八重衣/五段砦/四季の曲
- 第三集 ▶CLS-5199
六段の調/春の曲/梓
- 第五集 ▶CLS-5245(各¥2,000)
青柳/屋嶋/秋風の曲(前弾)

PCM
RECORDING

まるで
ドビュッシー、ラヴェルが
箏のために作曲したようだ!



- 三木 稔・監修
- 1978年8月
1979年1月
石橋メモリアル
ホールにて録音

ドビュッシー
月の光
子供の領分
ラヴェル
マ・メール・ロア
なき王女のための
バヴァース

月の光
マ・メール・ロア

●OX-7155 ¥2,500
野坂恵子・二十絃箏エコー

COMPIRECORD

編集後記

本号の座談会では、音楽以外の分野で活躍なさっている邦楽家に対しては深い関心をお持ちの方々から、色々な意見を伺いました。ひとつの世界の中に長いこと、視野が狭くならないよう……、という風な反省も込めて企画しましたが、当事者には気のつかないような、新鮮な内容として読んでいただけたらと思っています。

■ オリンピック参加云々が問題になっていますが、それに関連して頭をかすめるのが、これがスポーツでなく音楽だったら、

ということ。音楽は比較的天や早く「音楽に国境なし」「音楽は万国共通の言葉」などと美辞で飾られやすく、実際そのような感動を呼ぶシーンもあります。しかし一方で、状況はスポーツと似ているわけで、オリンピックのような羽目になる危険性は充分あるわけです。

■ 次号の特集は「現代邦楽のレコードあれこれ」とも言えますが、評論家の方々をお招きしての座談会、現代邦楽の「幻の名盤」(もしあれば)から、最新情報に至るまで……、を考えています。

(雷島)

邦楽現代第九号

定価三〇〇円

一九八〇年五月一日発行

発行責任者 三木 健

編集 雷島素子

日本音楽集団

東京都渋谷区神宮前6-16-14

小早川ビル2F

電話〇三三四〇九一五三七四(代)

Nihon Ongaku Shudan (The Nipponia)

Katayakawa Bldg., 6-16-14 Jingumae,

Shibuya-ku, Tokyo.

印刷 株式会社アジア企画群

表紙デザイン 及部克人

レイアウト協力 黒沢恭子

「邦楽現代」取扱店

東京と東京近郊——三越本店・高島屋日

本橋店・玉川店・横浜店・東武百貨店・

浅草松屋・川崎コミヤ(以上、武田屋楽

器店扱い)・琴光堂・邦楽堂 諏訪・松

本——琴光堂 金沢——関屋楽器 福井

——伊与楽器 奈良——中村楽器 京都

——金善楽器 岐阜——琴栄楽器

直接購読ご希望の方は日本音楽集団へお

申し込み下さい。尚、現在三、四号は品

切れ、一、二号は定価二〇〇円、五号以

降は三〇〇円、送料は二冊まで二二〇円、

四冊まで一六〇円。継続購読ご希望の方

は友の会B会員(詳しくは本誌21ページ

参照)になられるとお得です。

日本音楽集団のレコード (現在発売中のもののみ)

○現代物及び古典物

レコード・タイトル	収録曲名 (作曲者)	レコード会社/番号	定価(円)
響/和楽器による現代日本の音楽	組曲「人形風土記」(長沢勝俊)・しらみ第2 (八村義夫) 他	RVC/JRZ2505-8	8,000
人形風土記/子供のための組曲	組曲「人形風土記」・子供のための組曲 (長沢勝俊)	RVC/JRZ2523	2,200
野坂寛子古典音楽集	一集—千鳥の曲・八段・鳥 他 二集—八重衣・五段結 他 三集—六段の調・春の曲・梓 四集—越後獅子・みだれ他 五集—青柳・関崎・秋風の曲前奏	COL/CLS5168-5169 5198, 5211, 5245	各2,000
(第一集—第五集)			
邦楽器のためのシャコンヌ	シャコンヌ (安達光世)・鶴の華舞・春の曲・春の宴	オーティス・オニオン/Au5	3,000
三木健作品集I—III	I—古代舞曲によるバラツレーズ・II—ソネット・華道詩集 ・四群のための形象 III—序の曲・鶴のうた・天知・長響	COL/GZ7003-5	2,000
積善/長沢勝俊作品集	二つの舞曲・華西重奏曲・詩曲・青春	RVC/JRZ2558	2,200
まゆだまのうた/長沢勝俊作品集	三絃協奏曲・笛と打楽器のための音楽・二つの田園詩・まゆだまのうた	RVC/JRZ2574	2,200
めばえ/三木健音楽vol.1	ダンス・コンセルタント・学生と・舞子・夕影の詩・竜田の曲	カメラータ/CMT1001	2,500
NHKドラマ「道門秘帖」物語	テーマ音楽・千鶴の曲・山千両・おつなラヴソング・月夜の剣士 他 作曲:三木健 語り:古今亭志ん朝	東芝/TP72283	2,300
雅(みやび)/PCM録音による	華やか(三木健)・六段の調・みだれ・新八千代獅子	COL/WX7510	2,500
三木健/二十絃華/野坂恵子	鶴の曲・白蝶・まばらしの糸・天知・佐保・竜田・華道詩集II・ひな祭り 他	カメラータ/CMT3002	10,000
録音によせて/長沢勝俊作品集	春三組・尺八協奏曲・録音によせて・現録による三つのバラード	RVC/JRZ2577	2,200

○解説物及び入門物

日本の楽器	日本の各楽器の代表的古典曲・他に現代曲の一部収録	RVC/JRZ2520-1	4,400
日本の楽器入門	華のなま・尺八のなま・三味線のなま・太鼓のなま	COL/ELS3342-3	3,000
華の演奏法 (初級編)	尺八演奏法の基本練習他 (宮田時八郎編)	VIC/SJL2115	2,000
尺八の演奏法	華と尺八 (初級編)	VIC/SJL462	2,200
華と尺八 (初級編)	華と尺八 (初級編)	VIC/SJL177	2,200
華と尺八 (中級編)	華と尺八 (中級編)	VIC/SJL178	2,200

○編曲物

青柳華 相澤合奏による日本のメロディ	VIC/SJL99	2,200	「華」ウィヴァルディ・四季	東芝/TA60060	2,000
尺八/山の詩・海の詩・星の詩	COL/FZ7015-7	各2,000	「華」セバスチャン・バッハ	東芝/TA72037	2,300
尺八・虚無僧の世界	COL/WX7506	2,500	「華」モーツァルト	東芝/TA72042	2,300
ラヴェル・ドビュッシー/二十絃による	COL/WX7510	2,500	I. スターン日本の調べ	CBS/25AS42	2,500
			ピーターと狼	25AG411	2,500

その他にカセットテープもあります。

三木稔の音楽は、今日の音楽が達成したひとつの驚異である

驚異の音楽

三木稔の音楽のなかに、かがやかく顕示された劇的運動は、同時代の日本の作曲家たち、ヨーロッパ楽器を駆使し、精妙なヨーロッパ語法で書いた、どの作品よりも、劇的な音のうねりをもって、われわれの耳をおどろかし、胸をうち、そして心をなごませる。

伝統というものは最も革新的なものでなくてはなりません

三木稔が二十絃の為に書いたこれらの音楽は、最も伝統的な音楽として、邦楽にかかわる人は聴き逃すことは出来ません。

昭和54年度文化庁芸術祭「優秀賞」受賞

野坂恵子・三木稔

二十絃箏の世界

世界のソリストたちが一様に称える、その激しい音への感受性、めくるめく音色、黄金の左手が紡ぎ出した十曲の奇蹟。

三木稔作品

破の曲（箏とオーケストラのための協奏曲）

序曲と「春驚嘆」（オペラ「春琴抄」より）

ひなぶり（フルートと二十絃のための）

白煙（ヴァイオリンと二十絃のための）

東から（カメラータ・レコード委嘱）

まぼろしの米

箏 譚詩集 第二集（牙ばえ・華やきを含む）

天如



●CMT-1015-1018 4枚組 ¥10,000
◎全国レコード店で好評発売中◎

野坂恵子（二十絃箏）
セヴェリーノ・ガッゼローニ（フルート）
東京フィルハーモニー交響楽団

徳永二男（ヴァイオリン）
伊藤惣一（語り）
山岡重信（指揮）
群馬交響楽団

Camerata

発売元 ● カメラータ・タワキョウ
販売元 ● RVC株式会社



文芸評論家 篠田一士（『ユリドランシーノ』著者）

出版案内



全音楽譜出版社
ZEN-ON MUSIC

〒162 東京都新宿区東五軒町25
電話・東京(03)267-4321
振替・東京195092

邦楽器による現代作品の粋を網羅する
現代邦楽ライブラリー

●No.	●作曲者	●作品	●定価
1	三木 稔	四群のための形象	¥ 500
2	三木 稔	箏 詩集	¥ 300
3	諸井 誠	〔対話五題〕二本の尺八のために	¥ 300
4	助川敏弥	邦楽器のための〔形象〕	¥ 300
5	間宮芳生	四面の箏のための音楽 三面の箏のための音楽	¥ 650
6	小山清茂	和楽器のための四重奏曲第2番 和楽器のための三重奏曲	¥ 650
7	長沢勝俊	尺八・箏による〔新春〕	¥ 400
8	長沢勝俊	箏四重奏曲	¥ 600
9	清瀬保二	尺八三重奏曲	¥ 500
10	湯山 昭	三面の箏によるカプリース	¥ 650
11	三木 稔	独奏尺八のための〔孤響〕 三本の尺八のための〔ソネット〕	¥ 500
12	間宮芳生	尺八のためのプレリュード1・2	¥ 500
13	山本邦山	尺八作品集1	¥1000
14	佐藤敏直	ディヴェルティメント	¥ 850
15	石桁真礼生	箏のための組曲	¥ 500
16	三木 稔	二十絃箏のための三つの作品 〔天如〕〔佐保の曲〕〔竜田の曲〕	¥ 800
17	広瀬量平	〔アキ〕二つの尺八のための 〔鶴林〕尺八独奏のための	¥ 700
18	清瀬保二	尺八と箏五重奏曲 日本楽器のための四重奏曲	¥ 800
19	篠原 真	箏のための〔たゆたい〕	¥ 500
20	石桁真礼生	箏・鼓・笈による〔無依の咏〕	¥ 800
21	長沢勝俊	〔詩曲〕〔まゆだまのうた〕	¥ 500
22	三木 稔	〔夕影の詩〕〔箏双重〕〔雅びのうた〕	¥ 700
23	小山清茂	〔赤土になる妹〕〔樹下の二人〕	¥ 700
24	松村慎三	〔詩曲一番〕〔詩曲二番〕	¥ 600
25	山本邦山	尺八作品集2	¥1500
26	清水 脩	邦楽作品集1	¥1500
27	山本邦山	尺八作品集3	¥1500
28	長沢勝俊	〔二つの田園詩〕	¥ 500
29	野田琢行	四重奏曲第1番	¥1000